

風俗

542

212

全譯

聊齋志異

卷一

1805/1742

~~(國) 文學~~  
~~(號)~~  
~~永久 存~~

風俗  
號 542  
永久 存

圖書課長

事務官



禁止



11、2

内地支那各地  
手動抄本  
敬言抄本  
山石

高級文藝作品たるもの

より假名やい

通俗的に過る

増あり  
禁止すべきものは

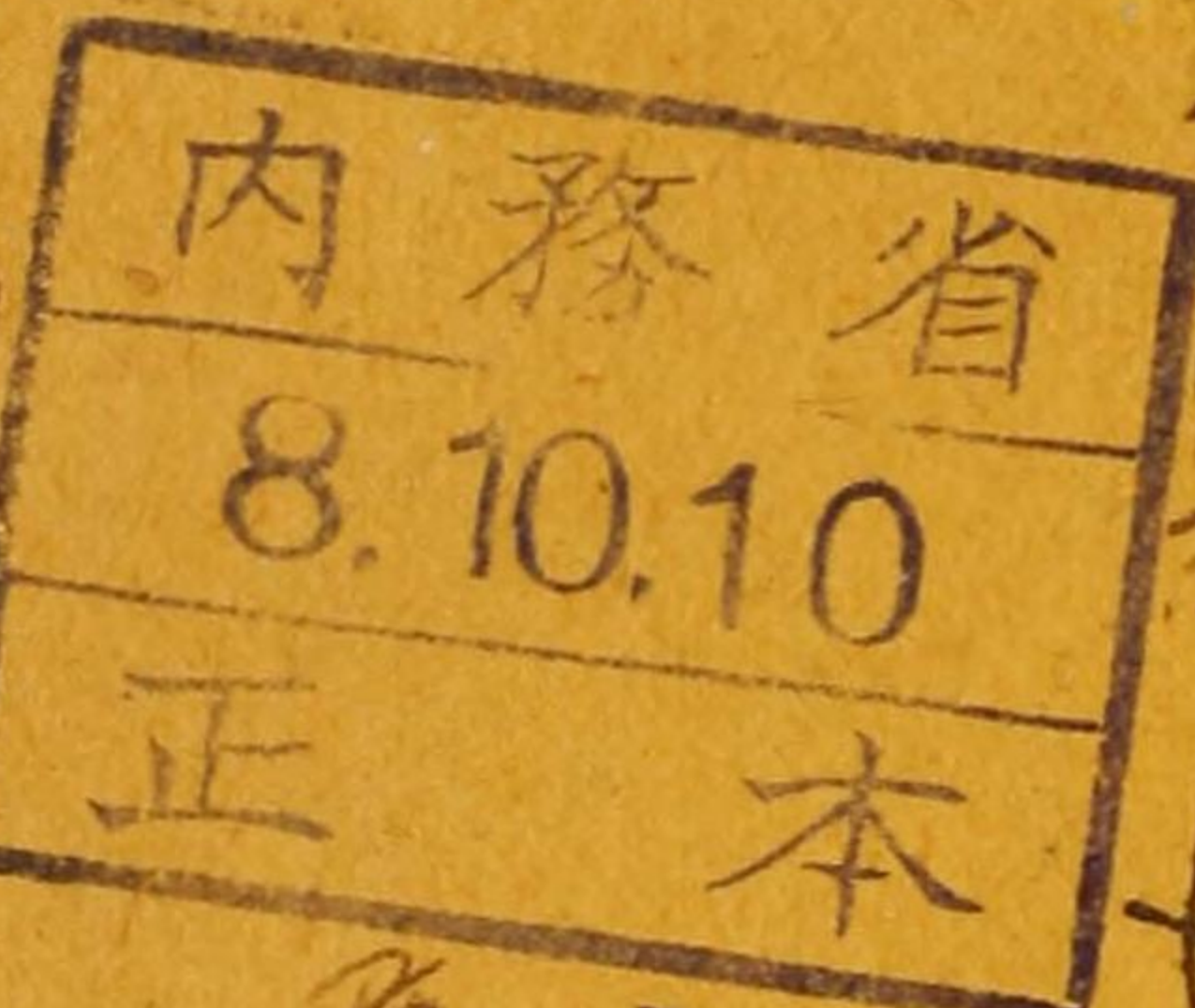


一、抽象的筆致

一、卷面法若くは  
類々異ニス

山東省海川人蒲松擘、名著「金瓶梅」の巻頭の四言詩  
より成り、鬼狐仙怪の法に多し、支那之高級藝術に  
稱するべきもの、情神、悦異、譚、細、描、支那文字の法上

二、拙劣な輝光の極端な性質、異義書中、  
定礎と稱せしもの、従来部分のハ  
廣く却法が法にさして居る



折込箇所に、記号、及び、  
都分、記号、及び、  
不記号の部















Pu, Sung-ling

v.1  
1933

柴田天馬

全譯

聊齋志異

第一卷



東京第一書房發行

PL 2722

U2 L516

1933

Vol. 1

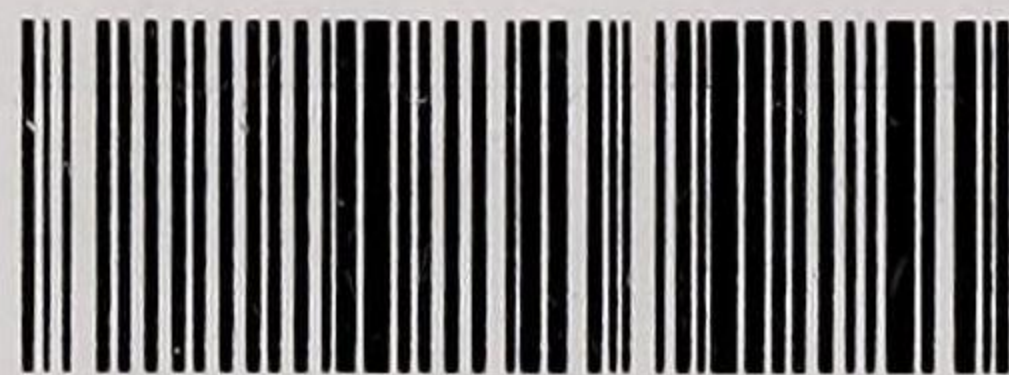
Copy 1

Asian

Japan

Copy

LC Control Number



00 505968

## 序言

聊齋志異全十六卷四百四十四篇は悉く鬼、狐、仙、怪を誌したもので、其面白いこと、名文であること、何度讀んでも讀みあかぬこと等で、怪異叢書中の完璧と稱せられ、呂叔清先生の如きは「初め聊齋志異あるを知らず、其後之を聞て喜べるも又讀むを得ざるを憾みとす、長ずるに及んで之を讀むに、夙縁あるが如く、神興相通じて之を引くあるが若く、幾んど啜を忘れ枕を廢するに至る、噫、亦癖せり矣」といひ三年もかかつて聊齋志異註を著はした程である。蓋し是書は、支英辭典の著者ジャイルス博士が「あらゆる支那文學に涉り、豊富な引喩、流麗な行文、唯だカーライルの筆致が纔に比肩するだけだ」と評したやうに、迎接に違なき程多くの故典が、簡潔な文中に巧みに織込まれ、其面白さと同じ程度に難解であるから、若し呂先生の著が無かつたら、聊齋癖に罹るものは學者にのみ限られてゐたかも知れぬが、聊齋志異註が梓に付され、やがて本文に割註を入れたものが續々刊行されたので、今では、文字のある支那人にして是書を愛讀せぬ者はないといつてもよい程の有様である。

著者蒲松齡先生は山東省淄川の人、字を留仙、號を柳泉といひ、弱冠童試に應じ、康熙辛卯歲貢となり、文章風節を以て一時に著はれたにもかかはらず、其の運命は甚だ數奇で、生涯を荒山僻隘の郷に送り、是書を出版する費用さへ無かつた。始めて是書を刊行したのは萊陽の趙荷村太守で、其例言中に「是編の初稿は鬼狐傳と名けられた。後ち先生が舉人の試験を受けるために入場したら、鬼狐群集して之を揮へども去らなかつたので、禹鼎の曲傳を耻ぢ、軒轅の畢照を懼れるのだらうと察し、歸つてから他の條項を益して志異と名けた」といふ意味の一項がある。著者は其時の試験に落第したが、此間に於て百代の名著聊齋志異を完成したのであるから、失ふ所よりも得る所の方が多かつた譯である。しかしそれは、後世他人の下し得る判斷で、科擧制度の登龍門に失脚した先生の悲しみと憤りは、先生をしてますます「秋墳鬼唱の詩を愛聽」するに至らしめたといはれてゐる。

是書を繙く者の齊しく疑ふところは、如何にして斯くも不思議なことを斯くも澤山に集め得たかといふにあるが、著者の自志に「人の鬼を談ずるを喜び、聞けば則ち筆に命じ、遂に以て編を成す、之を久うして四方の同人又郵筒を以て相寄す」とあるのでみると、著者の見聞に當時の學者たちの見聞を加へて、支那の文藝復興期ともいふべき明末清初の怪異譚を網羅し得たのであつて、是書の大半が讀書人に關する事項で填め

られてゐるわけも、成程と首肯される。

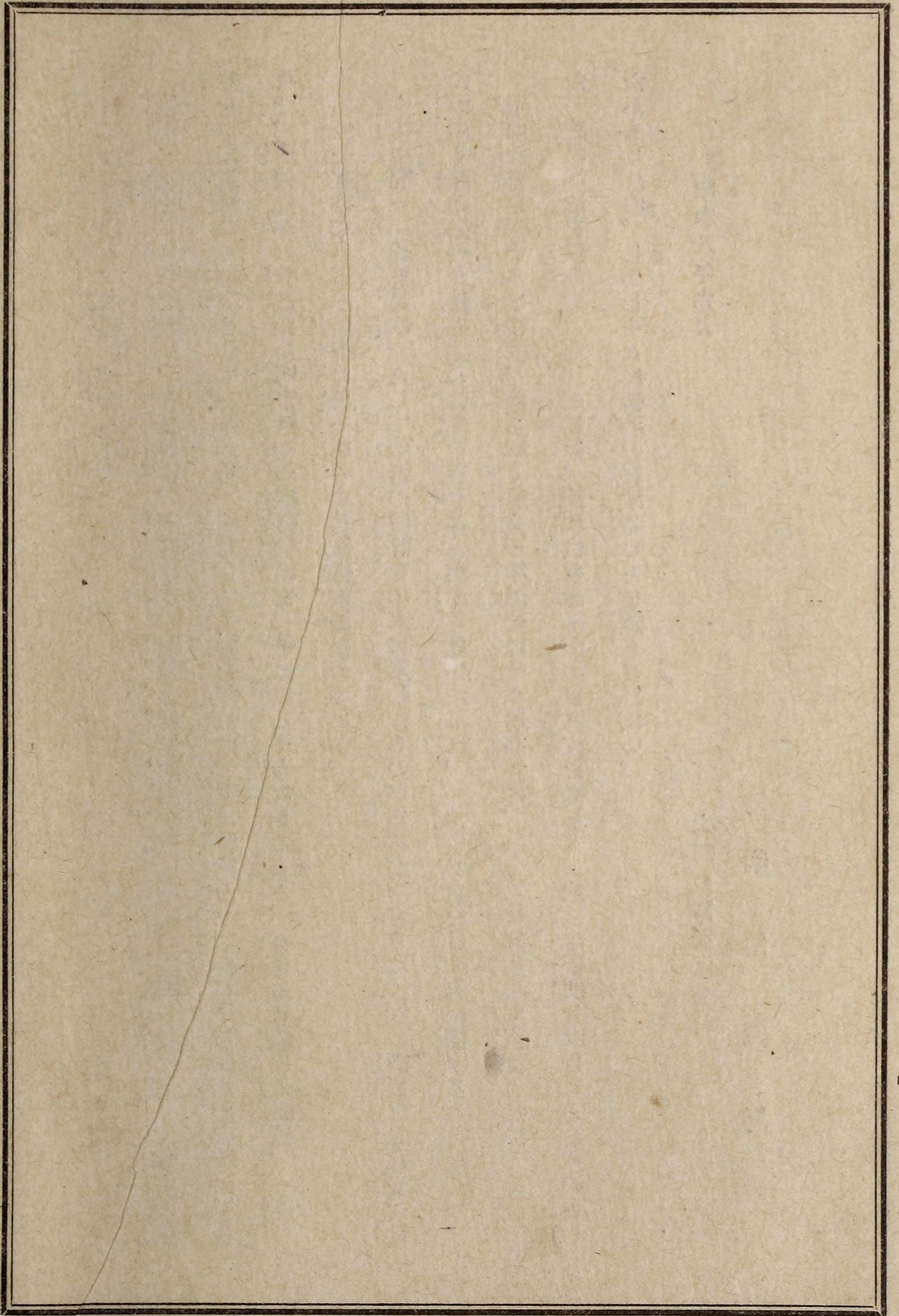
是書に載せてある事蹟は、貴賤貧富、老弱男女、賢愚雅俗を問はず廣く當時の國民一般に亙り、著者の靈筆を以て遺憾なく描寫されてゐるから、注意して是書を読めば、上は政治の通弊から下は閨房の祕事に至るまで、現代支那の骨髄たる明末清初の風俗習慣を、手に取るやうに知ることができる。故に是編は、一部の支那怪奇叢書であると同時に又一部の支那風俗畫譜なのである。

本書中間々「異史氏曰」として著者の短評を項末に附したものがあつたが、多くは儒家の訓戒に過ぎず、折角面白く読み終つた怪異譚の餘韻を殺ぐことが少くないために、一括して之を最終巻に掲げることにした。予は此書を譯するに當り、なるべく原文を増減せぬやうに心がけ、振假名を利用して直譯と意譯とを兼ねた一流の譯法を試みた。それが爲め、絢爛目を奪ふが如き原文を翻して、或は生硬蠟を嚼むごときものとしたかもしれぬ。しかしそこに苦心の存することを諒とされたい。

昭和八年九月

大連の寓居に於て

柴田天馬

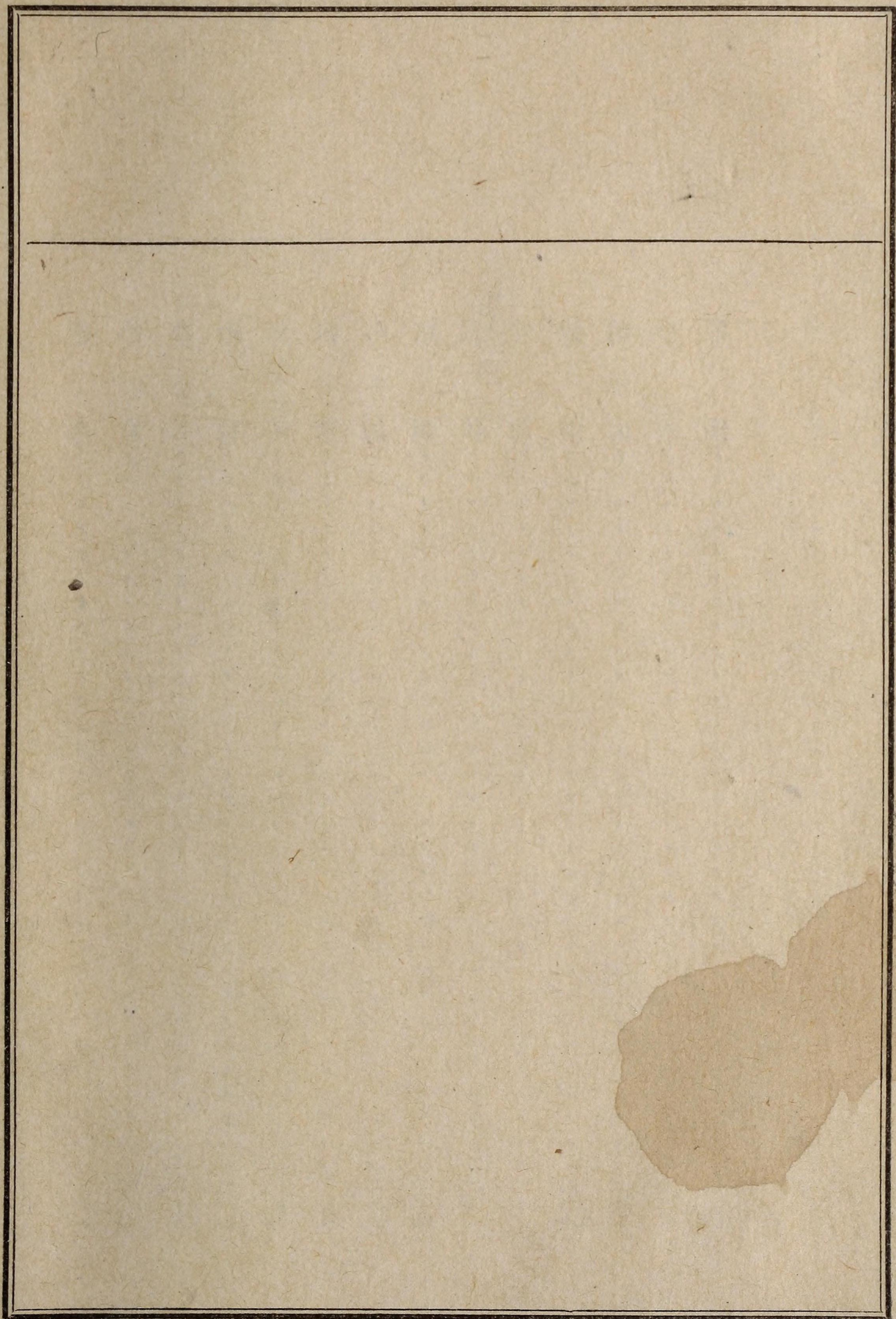












(一) 廩生といふのは府、州、縣の入學試験即ち童試に合格した生員中の優等生で、廩米を給せらるるものゝことである、生員で無ければ科擧に應ずる資格は無いのである。

(二) 詩の秦風に有馬白顛とあり、傳に白顛額有白毛今謂之顛とある。

(三) 元來は文章を能くし人の宗仰を受ける者のことであるが清朝では學政使を尊稱して文宗といつた。

(四) 漢の後帝建興七年に關羽に壯繆と謚したので關帝を尊んで關壯繆といふのである。

## 考城隍

予の姉夫の祖の宋公は諱を燾といつて邑の廩生であつた。一日病で臥て居ると、吏が牒を持ち白顛馬を牽いて來て、

「請ぞ試に赴く下さい」

と云ふので、公は言つた、

「文宗が未臨のに何遽得考けられるんだ？」

けれど吏は不言で但だ敦に促之ので、宋公は疾を力し、馬に乗つて從去つた。甚に生疎い路であつたが、一る城郭に至てみると王者の居る都のやうであつた。移時て府廨に入つていつた。宮室壯麗ばかりで、上には十人餘りの官が座つて居た。都な何人だか知らないなかに、關壯繆だけが可識つて居た。簷下には几と墩とが各二設けてあつて、自分より先に一の秀才が其末のはうに座つて居た。宋公は便で與連肩たのであつたが、見ると、几の上に各れ筆と札とがおいてあつた。

(五) 秀才とは讀んで字の如く才の秀でたものの稱呼であつたのが後は一種の資格となつた。即ち府、縣、州學校の入學試験たる童試に及第したものをいふので、又生員とも稱された。

(六) 攝はとるといふこと。篆は篆書のこと。印といふ意味。職務を代理すること。

(七) 左傳莊八年に齊侯使連稱管至父戊葵邱瓜時而往曰及瓜而代とある、瓜のなる時に往つて瓜のなる時に交代しませうと云つたといふ故事から交代のことを瓜代といふのである。

俄、題をしたゝめた紙が飛下された。視之、八字で、

「一人一人、有心無心」

と云ふのである。

二人は文が成たので殿上に呈したが、宋公の文の中に、

「心有つて善を爲たのは雖善も賞せず、心無く悪いことを爲たのは、雖惡も罰せず」

と云ふもんくが有つた。諸神は傳贊不已たうへ、宋公を召び上して諭曰けた、

「河南に一つ城隍が缺なのじゃ。君は其職に稱しい」

宋公は方と悟つた。で、頓首をして泣いて曰つた、

「辱膺寵命は何敢多辭せん但ど、老つた母が七旬になつて、奉養無人いのです。請ぞ其天命が終てから録用に聽ひたいとぞんじます」

すると、上の帝王の像をした者が、母の壽をしるした籍を稽るやうに命け、長鬚い

吏が冊を捧つて翻閱一過ほして白つた、

「陽算九年ございます」

で、共なが躊躇て居る間、關帝が、

「不妨ありません。張生に攝篆を九年いひつけて瓜代させれば可です」

と曰つ乃、宋公に謂はれた

と曰つ乃、宋公に謂はれた

「即、赴任さすべきはずであるが、仁孝の心を推しはかり九年を給假てつかはす。及期たら復た召すであらう」

又て數語か秀才を勉勵まされた。二公は稽首をして並に下つたが、秀才は手を握つて宋公を郊野まで送り、自分は長山の張某といふものだと自言て、別れの詩を贈つてくれた。

詩の詞は都な忘れてしまつたが、其中に、

「花有り酒有り春常に在り、月無く燈無く夜自ら明なり」

といふ句が有つた。

宋公は既に馬に騎つて別れて去るのであつたが、及抵里ら豁として夢が寤めた若になつた。其時は卒んで己ら三日めで、母おやが棺の中の呻吟を聞いて扶け出したのであるが、半

日たつてから始と能語へるやうになつた。長山を問ねさしたら、果して張といふ生があつて、

於是日に死んだといふことであつた。

後ら九年たつと母おやは果して卒なつた。營葬が既畢と宋公は浣濯をすまし、室に入つて

歿んだのである。

宋公の岳家は城内の西門のなかに居てゐたが、宋公が忽に鏤の膺や朱い幘で、輿馬甚衆をつれ、其堂に登り一拜をして行つてしまつたので、相共驚疑がり、神に爲つたとは知らず、奔いで郷中に訊にやつ則、已没んだあとであつた。

(八) 詩の秦風に虎  
鞞鏤膺とあり、傳に  
膺馬飾也とある。馬  
の腹帯である。

(九) 詩の衛風に朱  
幘鏤々とあり傳に幘  
飾也國君以朱纒且以  
爲飾とある。宋公は  
國君の如き様子をし  
て居たのである。

宋公そうこうが自じぶんで記しるした小傳せうでんがあつたのであるが、惜をしいことには兵亂へいらんの後無存のちなくなつてしまつた。此これは其略そのあらましである。

(一) 日本では遊女といへば娼婦のことであるが、此遊女は野に遊女ありと詩經にあるやうなぶらぶら散歩して居る女のことである。

(二) 杜甫の貧交行に紛々輕薄何須數とあるが、此場合の輕薄は蕭統の所謂洛陽輕薄子長安遊俠兒、或は沈約の所謂洛陽繁華子長安輕薄兒などの輕薄で、遊治郎的の態度をいふのである。若い女を見て「ヨイシヨイ」などといふたぐひだ。

(三) 春分後十五日。

(四) 婦人の乗車には顔を見られぬ様といふので、前後に戸のやうなものを

## 瞳人語

長安の士方棟は有名才子であつたが、佻脱で禮義などには頓着しない男で、陌上で遊女を見たと輕薄に尾綴てゆくといふ風だつた。

清明の一日前のことだつたが、偶々郊外を歩いて居ると一つの小さな車に出逢つた、朱の葦、繡りの幘といふ美しい車で、數輩の青衣が欸段に乗つて従いて居た。其うちで小さな駟に乗つて居る婢が絶美容色だつたので稍近よつて覗いてみると、車の幔が洞開て居る中には二八ばかりの女郎が座つて居た。紅粧ひの艶麗さ。今まで睹たことも無い美人である。生は目眩神奪しまつて或先り、或後り、何里かを従ていつた。忽、女郎が婢を車の側に呼び近けて、

「爲妾に簾を垂しておくれ。何處の風狂兒か知れないが頻りに來て窺瞻くんだよ」

婢は、乃、簾を下ろし生を顧つて怒つて曰つた、

「此は芙蓉城の七郎さまの新婦の歸寧で、放教に秀才たちに胡覷させる田舎娘とは非同



ける。詩の衛風にも  
翟芴以朝とある。

(五) 蒼頡篇に、帛  
を車の上に張るを幘  
とすといふことが出  
てゐる、母衣のやう  
なものである。

(六) 後漢馬援傳  
に款段の馬を御する  
といふことがある。  
款は緩で、しづかな  
馬といふ意味であ  
る。

(七) 詩經に、載駮  
載駮とある。字の如  
く四頭の馬といふこ  
とであるが、ここで  
は單に馬と思へばよ  
い。

(八) 石曼卿が死ん  
だのち友人に出逢つ  
ていふには、自分は  
今仙人となり芙蓉城

ますよ」

言ひ已ると轍の土を掬つて生に颺けた。生は眯して目が開かない。纒して眼を拭ふと  
車も馬も已う渺かつた。驚疑に思ひながら返つたが、どうも目が不快ので人を倩んで瞼を啓  
けて見てもらふと、睛の上に小さな翳が生て居た。經宿になると益々劇しく痛んで涙が止度  
もなく簌々生る。翳は漸次大きくなつて數日の後には小錢ほどになり、右の瞳に旋螺がで  
きた。百様な藥を用ひても効がないので懊悶欲絶ると共に、頗く自分でも懺悔するところが  
あつた。で光明經が能く厄を解くと聞いたので一卷をもとめ、人に教へて貰つて誦で居た。  
初の間は煩燥しておちつかなくなつたが、久しく經つうちに漸次氣が安らかになり、旦晚無事  
惟跌座して珠數を捻つて居た。かうして一年ばかりすると萬縁が俱な靜かに思はれて來た。  
一日右の目の下で蠅のやうな小さな聲がした。

「黒漆々で耐耐ん！ 殺人！」

左の目の中で應じた。

「一緒に出て遊ぼう！ そして出此悶氣をしよう！」

で、兩方の鼻の中が蠕々癢くなつたかと思ふと、有物孔から出て去つたやうであつたが、  
久之して返つて來て復た鼻から眶の中に入つた。そして言つた。

「許時園亭を窺なかつたが珍珠蘭が遽に枯瘠死しまつたぢやないか」

の城主なのであるが、君と一緒に遊ぼうと思つて誘ひに来たといつた。けれども友人が承知しなかつたので腹を立て、白い驢馬に乗つていつてしまつたといふことが歸田録に書いてある。

(九)文中子に蒙塵而欲無昧不可得絜とある。眼の中に物が入つて視る事が出来ないといふ字である。

(一〇) 古器評に周の札鈕鐘銘の文磨滅して識るべからず旋螺の状を作すといふことが書いてある。茲では眼球に旋螺の如きくもが出来たといふ意味であらう。

生は香蘭が喜で園の中に多に植ゑ日常に水を漑いで居たけれど、失明なつてからは久しく不問で置いたのであつた。で、今此言葉を聞いて、

「何故蘭を憔悴死たのだ」

と細君に聞いた。細君は驚いて、

「貴郎何うしておわかりになりますか？」

と詰めた。生は故を話した。細君が園にいつて調べてみると、花は果して槁れて居た。大そう異がつて、靜に房の中に匿れて居ると、小さな人が鼻の内から出て來た。大きさは豆ほども無い。熒々然門を出て遠くの方へ見えなくなつたが、俄かに臂を連ねて歸つて來た。そして面へ飛びあがつて丁度蜂蟻が穴に投つて行くやうに鼻の穴に入つてしまつた。此な風で二三日過ぎると又左の方で言つた、

「どうも隧道は迂遠くて還往が甚く不便だ。不如自分で門を啓けようではないか」

右で應へた、

「僕の方は壁が厚いから容易でない」

左がいつた、

「僕が開けて試よう。そして與而俱に出入しようではないか」

さうかうするうちに、左の眶の中が抓裂かれるやうであつた。有頃して目を開くと几の上

(二一) 耐は匣に同じ、正字通に耐耐不可耐也とある。

(二三) 珍珠蘭一名奂子蘭、色紫にして蓓蕾珠の如く花穂を爲す香甚だ濃かなりと、群芳譜にある。

の物が豁り見える。喜んで細君に話したので、細君が審べて見ると、脂膜に小さな竅が破いて、黒い瞳が熒々と光つて居た。竅は纔と山椒の實ぐらゐであつたが、越一宿は翳障が盡り消えて了つて、瞳が二つになつて居た。但し右の目は旋螺が故の通りであつた。乃知兩方の瞳の人が、一方の眶の中に同居することになつたのだ。生は一目眇にはなつたけれど、雙目の人に較べれば殊更了了になつたのである。由是は益々自分で檢束け、郷中の人から稱盛徳るやうになつた。

(二) 孝廉とは、孝行廉潔な人といふ意味で、前漢以來士を徵するの科目となつたのである。即ち今の特別任用令とでもいふべきであらう。しかし後には孝廉必ずしも孝にして廉ならざるに至つた。

(三) 柳宗元の文に蘭若眞公とある。官から額を賜うた寺のこと、私造のを招題蘭若といふのださうだ。蘭若はランニヤで、梵語のアランニヤ(寺院又は空靜の義)だといふことである。

(三) 挂褙は敝衣を懸けるといふことである。葛長庚の雲遊歌に、福建出來到龍虎山上清宮中謁公主未相識前來挂褙知堂

## 畫壁

江西の孟龍潭が、朱孝廉と與に都中に客をして居た頃のことである。偶ま一蘭若に涉た。殿宇禪舍俱に甚り宏敞からず、唯一の老僧が其中に挂褙で居て、客の入つて來たのを見ると、衣を肅へて出で迎へ、導をして與に隨喜するのであつた。殿の中には誌公の塑像があつて、その兩側の壁に畫いてある圖繪の精妙さといつたら、人物など生きて居るかと思はれる程であつた。東の方の壁に畫いてあるのは花を散いて居る天女であつたが、その内の垂髻の一は花を拈んで微笑んで居た。櫻のやうな口もとが動きさうで、眼からは秋波が流れさうである。朱は久いこと注目めて居たが、そのうちに不覺ず神が揺ら揺らして意を奪られ、恍然凝想めたまま、身が忽ち雲霧に駕つた如に飄々つて、已て壁の上に到いた。見ると殿や閣が重々つて、復た人間の世界ではない。一の老僧が席に就いて説法をしてるのを繞いて甚衆の人が偏袒して聽聞して居た。朱も亦り其の中に立つて居た。少間すると、有人ら暗と朱の裾を牽ばる似である。回視く則、垂髻兒が、蹶然して竟去つた。朱は履即從之

嫌我身襤褸とある。茲では分り易いやうにすんでとしておいた。

(四) 杜甫の望兜率寺の詩に時應清盥罷隨喜給孤園とある、釋家では閑要のことを隨喜といふさうである茲でははなしなどすると譯しておいた。

(五) 神仙傳に誌公面瑩徹如鏡手足皆烏爪とある。

(六) 白居易の詩に櫻桃樊素口楊柳小蠻腰とある。日本ならば苔のやうな口もとといふところである。

(七) 原文には眼波將流とある、眼波では日本式でないの

いつた。女は折れ曲りになつた欄の道を過つて一る小さな舎に入つた。朱は次且して不敢前に居ると、女は回首て手に持つて居た花を擧げ、遙々で招く状を作る。乃、趨之ていつた。舎の内は寂として人も居無かつた。朱が遽擁之などしても女は甚く拒まうともしない。それで遂ろ與狎好になつた。既て女は效をしないやうにして居てくださいと囁んで、戸を閉めて去つた。そして夜になる乃、復た來た。如此して二日經つと、女の伴が覺之つて、共で生を搜得し、女に戯れて曰つた、

「腹中の小郎が已う許大くなつたのに、尙だ髪を蓬々さして處子の學をして居るの。」  
で、共で簪や珥を捧り、促令上鬢した。女は含羞さうにして不語つて居た。一の女が曰つた、

「妹々姊々！ 吾等は久住をしないやうにしませう。恐人不歡から」

で、群な笑ひながら去つてしまつた。生が女を視ると、鬢雲高簇く、鬢鳳低垂く、垂髻にして居た時に比べると尤艶絶しかつた。四顧に人も居無かつたので漸入猥褻はじめた。蘭麝の香りが薰心くばかりである。樂方未艾に、忽ち吉莫鞞の音が鏗々と甚厲く聞え、縲鎖が鏘然なつて、旋に紛囂騰辯之聲がした。女は驚いて起ちあがり、朱と與に竊視いてみる則、金の甲を著、漆で塗つたやうにまつ黒い面をした一の使者が、鎖を縮ね槌を挈つて立つて居た。そして衆の女たちは之を環のやうに繞て居た。使者は曰つた、

で、秋波としたのである。

(八) 偏袒とは片肌を露はすこと。普門品に爾時無盡意菩薩偏袒右肩合掌向佛とある。

(九) 易に其行次且とある。進まんとして進み難きかたちをいふのである。

(一〇) 原文とは少し意味の軽い假名をつけておいた。支那の小説を譯すのにはかういふ手加減も止むを得ぬ。

(一一) 使者は王命によつて使ひするものことである。ここでは天上の巡查が憲兵ぐらゐな格だ。

(一二) 莊子の齊物論に心固可使如死灰とある。燃えつきた

「全たか、未か」

「已ら全てます」

と、女たちは答言た。使者は曰つた、

「如し下界の人間を藏匿ておくやうなものがあつたら即、共に出首しろ。勿貽伊戚！」  
女たちは又同聲へて言つた、

「無ん！」

使者は身を反へしながら愕顧た。匿れて居るのを捜さうとする似である。女は大そろ懼れて、面が死灰の如になり、張皇て朱に謂つた、

「急いで榻の下にお匿れなさい！」

乃、自分は壁上の小さい扉を啓けて、猝いで遁れ去つたのである。

朱は伏れて少との息さへ不敢かつた。俄、鞞の聲が房の内に至て、復た出ていつた。未幾

に煩喧い聲が漸と遠くなつた。それで心が梢は安た。然ども戶外に輒、まだ往つたり來

たり語論たりして居るものがあつた。朱は既う久しく跼蹐で居たので、耳際蟬鳴はする。目

中は火出る、景狀殆不可忍であつた。それでも惟だ靜かに女の歸つて來るのを待つて居て、

竟復身が何自來たかを憶へなかつたのである。

その時孟龍潭は殿の中に在たが、轉瞬と朱が見えなくなつたのを疑つた以て僧に問

灰といつた意味である。

(二三) 壇越の壇は施しといふこと、施しをして貧窮海を越し彼岸に到るところから壇越といふのである。で、僧侶は分施をしてくれるやうな人に對して壇越の稱を與へるのである。

(二四) 山堂肆考に肉髻如青螺故云螺髻とある、鬘を高くつかれたのが青螺のやうだといふのである。俗に謂ふイボシリ巻きの上品なものだ。

ねた。僧は笑つて曰つた、

「説法を聴きにいつたんです」

「何處へです？」

「遠方ではありません」

で、少時してから指で壁を弾いて呼んだ、

「朱壇越！ 何ぜ久も遊んで 歸らんです」

旋、見るみる壁の畫の中に朱の像があらはれた。耳を傾げて佇立で居るのが、聽察てゐる若である。僧は又呼んで曰つた。

「遊侶が久しく待つてです」

遂、壁から飄忽と下たが灰心木立に、目瞪足栗になつて居るので、孟は大そろ駭いて、從容に問た。方ど榻の下に伏れて居ると、叩いて呼ぶ聲が雷のやうに聞えた故、房を出て窺と聽いたのであつたさうだ。

共に、花を拈つて居た人を見ると、螺髻翹然と結つて復う垂髻ではなかつたのである。

朱は驚いて考僧を拜み、其の故を問ねた。僧は笑つて曰つた、

「幻は人から生ずるのです。老僧に何にが解りませうぞ」

朱は氣結れて不揚い。孟は心駭て無主い。即、起ると階段を下りて出ていつた。

## 種梨

郷むなかのひと人が有あつて梨なしを市まちで貨うつてゐた。頗たいう甘あまくて芳にほひがよかつたから、たちまち價ねだんが騰たか貴かくなつた。すると破やれ巾ずきん、絮やれぬ衣ぬのの道だうし士しが有あつて、車くるまの前まへに丐もらひに來きた。郷むなかのひと人は咄しかつ之つた而けれど道だうし士しは去いなかつた。郷むなかのひと人は怒おこつて、加ま之ま叱ますり罵しかると、道だうし士しは曰いつた、

「二ひと車くるまに數なんび百やく顆かくとあるのぢやがナ。老こ納わしは其その中なかの止たつた一ひとつを丐くださいといふので、居あん士たには大たいした損そんでも無ないに、何なぜさう怒おこりなさるのぢや」

そこで觀みて居ゐた人ひとたちが、劣わるい者ものを一ひと枚まいやつて去いせなさいと勸すすめたけれど、郷むなかのひと人は執き不か肯なかつた。肆みの中なかに居ゐた傭ほうこう保じんは喋や々ましくて不堪たまらなところから、遂たうとう錢ぜにを出だして一ひと枚まいだけ市かひとつて道だうし士しに付やる道だうし士しは拜お謝じをしてから、衆ひとにむかつて曰いつた、

「出しゆ家つけ人じんといふものは吝け惜ちといふことを解しりませんぢや。我わしに佳よい梨なしが有ありますでナ。そ

れを出だしてお客きやくさんがたに供あげ請たいと思おもひますぢや」  
或あるが曰いつた、

(二) 納なはこるもの  
こと、それで僧そうのこ  
とを納な子しといふ老らう納な  
は年ねんをとつた僧そうとい  
ふ意い。



「既有之ら何ぜ自分で食はないんだ」

道士は曰つた、

「我は特に此の核を需つて種に作ようと思ひましたからぢや」

於是梨を掬つて啗且盡ひ、その種を手に把ると、肩上の鏡を解して、地上を深幾寸か坎り、之を納れて覆以土せ市の人たちに向つて、沃灌る湯を索れといつた。好事な者が路店に臨つて沸瀋を索め道士にやつた。道士はそれを接とつて坎た處を浸した。萬目攢視て居ると勾つた萌が出て来る。漸々大きくなる。俄に樹となる。枝葉が扶疎る。倏ちにして花が咲く。倏ちにして實が生る。碩大い芳馥いのが纍々滿樹に生つた。道士は乃で即樹頭摘みとつて觀て居る者たちに分けて賜つた。頃刻而盡つてしまつた。已乃と道士は鏡で樹を伐りはじめ、丁々良久しくやつて居たが、乃斷ので、葉の帶たまゝ肩頭に荷ひ、從容徐歩而去てしまつた。

(三) 倭散とは分ち與ふることである。倭は分つことではあらといふのは和訓である。

初、道士が法術を作した時、郷の人も亦り衆の中に雜つて、引領して注目て居た。竟忘其業てしまつて居たのである。道士が既去始車の中を顧る則、梨は已う空なつて居たので、適ま倭散たのが皆な自分の物であつたのを方と悟つたのである。又細視ると車上の靶が一

(四) 粲然とは白い齒を出して大笑すること、穀梁傳に軍人皆粲然而笑、とある。

つ亡なつて居て、是は新に鑿斷たものであつた。心大憤慨がつて急いで迹をつけていつた。牆の隅を轉過る則、斷りとつた靶が垣下に棄てゝあつた。始と、道士の伐り倒した梨の木が、即ち是物であつたのを知つた。道士の所在は不知かつた。一市では粲然をしたのであつた。

(二) 山東即墨縣の東南に在る有名な山で、大勞小勞の二山に分ち、山中の寺觀には多くの道士や、道姑即女道士が住んで居る。

(三) 笈とは本箱の事で漢書蘇章傳に負笈從師千里とある、此では負笈往遊の四字を遊學に出かけると譯して置く。

(三) 梁の元帝が病氣の時漢中から道士を呼んで祈禱をさせた、其の道士を昆明觀に留めて置いたのて後世道士の居るところを觀といふやうになつた、此ではおてらと譯しておく。

(四) 穀梁傳に楚欲攻宋墨子自魯趨楚十

## 勞山道士

邑に王といふ生が有つた。行七で故家の子であつたが、少い時から道術を慕ひ、勞山には仙人が多居るといふのを聞いて、負笈往遊けたのであつた。

とある頂に登ると甚う幽た觀宇があつて、一の道士が蒲團の上に座つて居たが素い髪が頸に垂れ、神觀爽邁をして居るので、叩而與語してみると理が甚う玄妙しい。で、請んで師になつてもらはうとすると道士は「嬌惰だから作苦が不能ぬだらう」と曰ふ、しかし生は

「能之す」

と答言へすつかり弟子になりすました。門人が甚う衆あつて薄暮畢り集まつたので、王は俱與稽首し、遂う觀中に留ることになつた。

凌晨になると道士は王を呼んで斧を授し、衆に隨て採樵らした。王は謹んで教へを受け、一月餘りを過ぎしたのであつたが、手足に重繭ができて苦さに堪へぬところから陰い歸りた

日十夜、手重繭而不休、至郢見楚王とある。

(五) 葉法善が月宮に入つたとき、廣寒清虚の府といふ榜のある廣庭の桂樹の下で十餘人の美女が音楽につれて舞ふて居たが餘り清らかな樂なので、其半ばを記して笛の中へ入れて持ち歸つた、會ま西京節度使の楊敬述といふ人の傳へた婆羅門の曲が月宮で、聽いた音楽と同じであつたので、其曲を霓裳羽衣の曲と名づけたさうだ。大真外傳に妃醉中舞霓裳羽衣一曲天顔大悦とある

い志がでてきた。

一夕かた歸つて見ると、二人の人が師と共に酌んで居た。日は已う暮れたのに尙燈燭もつけてなかつた。すると師が鏡の如にまあるく紙を剪つて壁間に黏りつけたら、俄頃、月明が壁に輝き、その光鑑毫芒すごとくであつた。諸門人は環になつて聽奔走して居ると、やがて一の客が曰つた。

「良宵樂しむに勝へたりじや。しかし樂しみは同じでなければ不可ん」

乃、案の上の酒壺を取つて諸徒に分賚てくれた。且て盡に酔へと囁ふので王は自思た。七八人も居るのに一壺の酒が何で能徧給と。遂て各盞盃を覓り。樽の盡るのを恐しつゝ、競飲先酌むのであつた。而し往復挹注でも酒は竟ろ不少減かつた。王は心のなかでいと奇におもつた。

俄、一の客が曰つた、

「月明之照は蒙賜い。乃で爾に寂しく飲んで居ずに何ぞ嫦娥を呼んで來ないんだ」

乃、箸を月に擲ると一の美人が光の中から出てきた。初のうちは尺にも盈らないやうであつたが、地に至ると、人間と等高さになつた。織りした腰つき、秀とした頸すぢで、翩翩と霓裳の舞をまひ已而歌つて曰つた。

仙々乎

而還乎

而幽我於廣寒乎

その聲の清越く烈いことといつたらまるで蕭管をきくやうであつた。そして歌が畢ると、盤旋とまひながら、几の上に躍登つたので、驚いて顧てゐる間に、復もとの箸となつてしまつた。三人は大そう笑んだのである。すると又一人の客が

「今宵は甚ろ樂かつた。然し不勝酒力矣。我を月宮に餞つてくれんか」

と曰つた。そして三人は席を移して、漸月の中に入つていつた。衆は三人が月の中に座りこんで飲で居るのを見たが、鬚も眉も畢見して影の鏡に在るが如くであつた。

移時すると月が漸と暗くなつたので、門人たちが燭を然る則、道士が獨り座りこんでゐるばかり、客のすがたは杳なかつたが、几の上の肴核は尙だ存つたし、壁上には圓い紙が、鏡の如にはりつけられて居た。

道士は問いた、

「衆な飲足乎」

衆なは答へた、

「はい、足です」

道士はいつた、

(六) 史記韓信傳に李左車曰樵蘇後爨師不宿飽とあり、注に樵は取薪蘇は取草とある、たき木やたき草をとる、ことである。

「足だつたら早く寝るが宜い。朝になつて樵蘇をとるのを誤へてはならんぞ」  
衆は諾して引き退つた。王は竊に欣慕で、歸らうといふ念が遂う息んだ。  
又一月ほどすぎた。苦さは不可忍い而、道士は並と一術をも傳習へてくれない。王はたうとう心不能待に辭つて曰つた。

「弟子は數百里を遠しとせず、仙師に受業にまゐつたのです。縦へ長生の術は得られないにしても、或小有傳習ていただいたのなら永教之心も可慰るといふものですが、今う兩月も三月も閱ましたのに、早から樵にでて而て暮に歸るばかりでは、がっかりして了ひます。弟子は在家てさへ此な苦しみを未諳かつたんですから」

道士は笑つて曰つた、

「我は固から苦業は不能作と謂つたのだが、果して然りだつた。明は早く當遣汝行してやる」

王は曰つた、

「弟子は操作多日いたんです。小とした技でも授けてくだされば此來爲不負也が……」  
道士は問いた、

「何な術か求いのだ」

王は曰つた、

「毎も見しますが、師の行やるところは牆でも壁でも不能隔せんね。あの法が得れば足なんです」

道士は笑つて允之した。乃て王に訣を傳へ、自ら咒さしたのち、呼んで曰つた、

「さあ入れ」

王は牆に面ひながら不敢入なかつた。道士は又曰つた、

「試みに入之れ」

王は從容に入つていつたが、牆が阻で入れなかつた。道士は曰つた、

「首を俛れて驟入め！ 勿逡巡！」

王は牆から數歩か去れ、奔而入つた。牆に及つたが、虚若無物であつた。回視ると牆の

外に在た。大そう喜んで、入つて謝ふと、道士は曰つた、

「歸つたら宜潔持て居なくてはならん、否則と不驗いぞよ」

遂、斧斧へて遣之歸てくれた。

王は抵家ると、仙人に遇つて、堅い壁でも阻にならずにスラ／＼入れるといつて、自詡を

したが、妻が不信ないので師の做作爲て、牆を數尺か去たところから奔而入つた。頭が硬

い壁に觸つた。驀然而踏た。妻が扶けおこして視之と額上が墳起つて巨な卵の如になつてゐ

た。妻が擲揄ふので、王は慚忿り老道士の無良めと罵るばかりであつた。

(七) 易に旅得其資、斧とあつて、註に斧所以斫除荆棘以安其舍者也とある斧で息所の荆棘を斫るといふ意味から旅費をやることを資斧といふのである。

(八) 後漢王霸傳に市人皆大笑擲手擲揄之とある。

## 長清僧

(一) 僧の死ぬのを  
眞寂とも順寂とも圓  
寂ともいふ。

長清縣の某といふ道行高潔い僧は、八十餘りになつても猶だ健であつたが、一日、顛仆たまま起きあがらないので、寺の僧たちが救けに奔けつけたときには已う圓寂で居た。けれど僧自身は死んだことを知らなかつた。そしてその魂は飄と河南に去つたのであつた。

河南に、故紳子があつた。馬に騎つた十人餘りのともびとを率れ、鷹を按ゑて獲兎をして居ると、馬が逸たので、墮ちたまゝ斃でしまつた。

僧の魂は適こり相値つた。そして翕然と合になつたかとおもふと、遂て漸々蘇つてきたのであつた。

厮僕らが環て問之ると、いきかへつたひとは目を張り、

「胡して此な所へ至たんじや」

と曰つたが、衆は扶けてやしきに歸つてきた。門を入る則、粉白黛綠者が紛集つて顧問ねる

(三) 前漢公孫宏傳  
に位在宰相封侯而爲  
布被脫粟之飯とある

ので、大それた駭いて曰つた、

「我は僧じや。胡うして此んなところへ來たんじや」

家人は、妄つたのだと以爲ひ、耳を提へて悟之すのであつた。僧は亦う不自申解つた。但だ目を閉ぢてゐるだけで不復有言のであつた。で、脱粟を餉以せれ則食ふけれど、酒や肉は拒んでくはず、夜は獨りで宿て、妻や妾の奉を受けないのであつた。

數日かすぎた後、忽と、少歩きをしたいきがするといひだしたので、衆皆は喜んだ。既てそとに出て、少定をして居る即、諸僕が紛ばらやつて來て、錢の簿や穀の籍をもちだし、雜ごた會計を請ふのであつたが、公子は託以病倦け、悉り之を謝絶つて、惟だ、

「山東長清縣を知つてるか否か」

と問いた。共は、

「知之をります」

と答へた。公子は曰つた、

「我は鬱無聊頼いから、遊矚に往かると欲ふんだ。宜即治任をしてもらはう」  
衆は、

「新瘳なんですから、遠涉をなさつてはいけません」  
と謂つたが、聽かないので、翌日遂う發つことになつた。



長清に抵くと、風物が昨の如だつたから、途を問く煩しさも無く竟て蘭若に至た。お弟子の僧たちは貴な客人が至たのを見て、伏謁甚恭つた。すると公子は問いた、

「老僧は焉に往れたかね」

僧たちは答へた、

「吾師さまは曩に已う物化られました」

公子は問いた、

「お墓所はどこかね」

で、群で導して往つてみる則、三尺孤憤があつて、荒草猶未合なかつた。

衆僧は何んの意だか不知いでゐると、既而馬の戒をさせて歸らうとしながら、囑けて曰

つた。

「汝たちのお師さまは、戒行之僧だつたのであるから、所遺手澤は宜恪守て勿俾損壞ん

よ」

衆は唯唯といつた。乃でたつて行つたのであるが、既歸てからは灰心木座になつて家務な

ど不可句當つた。居數月ると出門自遁て直ぐに舊の寺に抵つた。そしてお弟子たちにさう謂

つた、

「我は汝たちの師なんじや」しかし衆は疑其謬とおもつて、相視而笑つてゐた。で僧

(三) 死をいふに忍びないので、物に随つて化したといふのである。

(四) 戒行とは殺生、愉盜、邪淫、妄語、酒肉の五戒を保つてゐるといふこと。

(五) 禮に父没而不能讀父之書、手澤存焉爾とあつて注に手之所持猶存潤澤迹也とある。手でもつた所があぶらじみになつてゐるといふ意である。

(六) 左傳僖二十四  
年に秦伯送衛於晉三  
千人實紀綱之僕とあ  
る。

(七) 論語爲政篇に  
三十而立とある。

は魂の返つた由を述し、又て平生の所爲を言つてきかせた。それが悉り符つて居たので、衆はやつとそれを信じ、故の榻に居かして、平日の如に事へたのであつた。

その後、公子の家から屢たび輿や馬をよこして、かへつてくれと哀請んだけれど略と不顧瞻かつた。すると又一年餘りして夫人が紀綱を遣して多な餽遣をしたのであつたが、金や帛などは皆な卻之して、惟だ一襲の布袍を受けとつた而已であつた。

友人が長清に至くこと或あつたをりに、敬造之つて見其人ると、默然りこんだ誠篤な僧になつてゐた。年は僅かに而立くらゐだつた而ど、八十年餘りの事を道すのであつた。

## 狐嫁女

(一) 名ば士儂字は棠川明の嘉靖庚子に舉人となり、丁未に進士となり、吏部尙書の官を務め、文莊と諡された人である。それで此話しは公が學生であつたころのことであるけれども、特に公と書いてある。

(三) 醜とは金を出し合つて酒を飲むことである。禮記に其猶醜與とある。

歴城の殷天官は少くて貧ではあつたが、有膽略る人だつた。邑に舊家の第があつた。その廣さ數十畝。樓や宇が連互いてゐたが、常う怪異がある以故、廢になつたまゝ、居人無く、久之なるうちに蓬蒿が漸滿ちしげつて、白晝でも敢入る者が無かつたほど、あれはててゐるのであつた。

公が諸生と飲んでる會に、或る者が戯れて云つた、

「此に寄つて一ばん宿れる者が有つたら、共で醜つて筵するがね」  
すると公は躍起つて曰つた、

「是亦何難さ」

で、一枚の席を携つて出かけて往つた。

衆は公を廢屋の門まで送り、戯れに、

「吾等は暫くは候つてるよ。如しなにか有所見、急と號りたまへ」

(三) 曆書に月至八日上弦至二十三日下弦とある。

(四) 牛女とは二十八宿中の牛金羊座と女土蝠座のことで、吳越の分野に當り、北方玄武の中に在り、牽牛星織女星とは別である。織女は銀河の北東にある三角形の星牽牛は銀河の西南岸に在る三つ星、牛金羊は牽牛の南方に銀河を頭にしてY字形をなす四つ星、女土蝠は牛金羊の西方にC字形をなす四つ星である。しかし著者は牽牛織女を指したものと思はれる。

と曰ふと公は笑つて、

「鬼か狐が居たら捉へて證據にしようよ」

と云つて遂う入つた。見ると長い莎が逕を蔽し、蒿艾が麻の如に生ひ茂つて居る。時値

(三) やうかはかり 上弦の新月が色昏黄と照らして門戸が可辨るので、公は摩婆りながら數づき進み、やつ

と後の樓に抵つて月見臺に登つた。光潔で可愛い。で遂う焉に止つた。西の方を望ると月

が明かで惟だ銜山一綫る耳である。座良久つて居たけれど更無少異い。公は竊かに傳言の

訛ひを笑ひつゝ、地に席を敷き石を枕にして臥ながら牛女星を看て居たが、向盡すると恍

惚欲寝しはじめた。と、樓下に履聲がして藉々と上つて来る。假寝をして睨で見ると、

一の青衣人が蓮形の燈を挑げてやつて來たが、猝に公を見たので、驚いて却退り、後の

人にさう曰つた、

「有生人在！」

後の人は下問た、

「誰也？」

前の人は答へた、

「不識！」

俄、一の老翁が上つて來、就諦視て曰ふのだつた、

(五) 僮僕とは不羈也と説文にある磊落な人のことだ。

(六) 東觀漢記に呂公謂高祖曰臣有弱息願奉箕箒とある。お側に居つてお掃除でも致させませうといふので、妻にやるのを謙遜していつたのである。

(七) 詩經に之子于歸とある。ここに歸くである。

「此は殷尙書だ！ 其睡已酣るから、但、吾の事を辨けよう。相公は僮僕かただから或叱怪だらう」

乃、相率て樓に入つて來た。樓の門が盡り闢いた。移時ると往來をするものが益と衆くなり、樓上の燈は晝の如に照り輝やいた。公は稍々と轉側つて噫咳をした。翁は公が醒めたのを聞知る乃、出てきて跪いてさう言曰た、

「小人に箕箒女がございまして今夜于歸を致します。不意ず有觸貴人になりましたが、望ぞ勿深罪まし」

公は起つて翁を曳きおこした。そして曰つた、

「今夕の嘉禮を不知かつたもんだから、賀も致さず、お慙かしい次第だとおもつてゐるんです」

翁は曰つた、

「貴人が光臨くださいますして厭除凶煞られるのは何より幸でございますよ。即、煩陪座れば倍益光寵いわけですが……」

公は喜んで應之し、樓の中に入つて視ると陳設が芳麗に出來て居た。遂、婦人が出て來て公を拜した。年の頃は四十餘りであらう。翁が、

「此れは拙荆でございます」と曰つたので、公も揖之した。ト、俄かに笙樂が聒耳く聞え、

奔けて樓に上つて來たものがある。

「至矣！」

(八) 呂覽に少選發而視之とある少選とは須臾である。

(九) 紗で張つた燈籠。

(二〇) 禮の聘儀の註に相出接賓曰擯とある主人側としてお客に應接する人である。

(二一) 正字通に切肉曰截とある。丸焼に對していつた切り肉でビステキなんかは無論截にあてはまる。

(二三) 李端の襄陽の曲に雀釵翠鳳動明璫とある。

翁は趨つて出迎へた。公も亦り立つて俟ちうけるのであつた。少選すると籠紗を持つた一簇が新郎を導いて入つて來た。年は十七八可だらう。丰采韶秀である。翁は先づ貴いお客さまに禮をせよと命じた。少年は公を目た。公は擯のやうにして半主の禮を執つた。次ぎには翁と婿とが交るがはる拜已。乃て席に即いた。少間たつと粉黛をしたのが雲のやうにつき従ひ、酒や、觥が霧の霏れるやうに供され、玉の椀や金の甌が几案の上に光り映ずるのであつた。酒が數行かした。翁は女奴を喚んで小姐を請てこさした。女奴は諾して奥に入つた。良や久しく出て來なかつた。翁は自分で起つて帷を擧げて催促した。

俄、婢、媼數輩が新人を擁いて出て來た。環佩が珍然鳴つて蘭麝が散馥つた。翁は女に命け向上拜せた。起つ即、母親の側に座つたのを微目之ると、翠い鳳のかざしに明つた璫をかけた容の華やかさ、絶世な美人である。

既而、みんなは金の爵で酒を酌むのであつたが、それは數斗の大きさであつた。公は思へた。此物を驗に持つていつて同人に見せようと。で、陰と袖中に納れ、偽醉をして几に隠りかゝりながら、頹然と寢てしまつた。すると皆は、

「相公はお酔ひになつたね」

(二三) 冥搜といふのは心のなかであれかこれかと捜すのである。

(二四) 世説に劉中郎遇褚司徒入朝以腰扇障日中郎從側過曰作如此舉止羞面見人扇障何益褚曰寒士不遜中郎曰不能殺袁劉安得免寒士とある。寒士とは貧乏な士人とでもいつたらよからう。

(二五) 闕子といふ人は宋の時の愚者であつた。梧臺の東で

と曰つて居た。居無何、新郎の告行といふのが聞えて笙樂が暴に作り、紛々樓を下りて去つた。已て主人は酒の具を斂けるのであつたが、爵が一つ少なくて、冥搜不得かつた。或るものが竊に臥て居るお客さまだらうと議つた。すると翁は急に語ては勿いと戒めた。公に聞えるのを恐れたのである。そして移時すると内外俱に寂りとなつた。公は始く起ちあがつたが、燈火が無くてまつ暗だ。惟だ脂香や酒氣が四堵に盈溢れて居るばかりである。東方が既白んだ乃、從容に出ていつて、袖中を探ると、金の爵は猶り在つた。門のところまで及る則、諸生が先俟て居て、公が夜出て朝早く入つたのだらうと疑ふので、公は爵を出して之を示せた。衆は駭いて問ねた。因、以状告した。共は此物が寒士の所有るやうなものでは無いと思つたの乃、之を信じたのであつた。公は後ち進士と擧つて肥邱に赴任したが、そこに朱宴公といふ世家があつて、公が其家に往つたら、主人が家の者に巨きな觥を取つて來いと命けた。久之たつたが不至つた。そして細奴が主人と掩口語すのであつた。見ると主人は怒つて居るやうである。俄、金の爵を奉てきてお飲みくださいと客に勧めた。款式雕文が狐の物だつた爵と更無殊別いので大そう疑ひ、製つたところを問ねると答へて云つた、

「爵は八隻あつて、大人が京の卿であつた時良い工を覓して製せたんです。此は世傳の物なんですから、什襲んで已久しいんですが、明府が辱臨くださつたので、適ま諸を箱

燕石を得たが、家に  
歸るとそれを十重の  
革匱に入れ什襲の緹  
巾に包んでおいたと  
いふ。燕石とは玉に  
似た石である。ここ  
ではそんなに大事に  
しておくといふ意味  
である。

(二六) 賓退録に明  
府漢人以稱太守唐人  
以稱縣令とある。

(二七) 唐の柳公權  
の奴に手癖の悪るい  
奴があつて、よく金  
なぞを盗むのであつ  
た。或時、杯をしら  
べたら箱の緘じ目は  
故の通りであつたけ  
れど中の杯は皆な亡  
くなつて居た。する  
と奴がいろいろなさ  
とをいつて胡摩化さ  
うとするので、柳は  
笑つて金杯は羽花し  
たんだらうといつた  
といふことがある。

籠から取り出しましたら、七つ僅存るので、家の人が竊取んだのだらうと疑ひはするものゝ、  
而し十年もたつて塵に塗れた封のあとが故の如になつて居るのが、殊も不可解んです」  
公は笑つて曰つた、

「金杯に羽化たんですね。然し世守の珍寶ですから失してはなりません。僕有一具が頗  
う此に近似ますから當以奉贈う」

で、筵が終んで署に歸ると爵を揀して之を馳送てやつた。主人は審視て駭絶した。  
そして親で出かけて詣つて公に謝を述べ、所自來を詰ねた。公は乃で事の顛末を歴と陳し、  
始めて千里の物でも狐は之を攝致ることが能る、而て終も留は不敢といふことを知つたの  
であつた。



(一) 史記酷吏傳には治政行少蘊藉とあり、詩經には飲酒溫克とあり、鄭箋には能溫藉自持とあり、憑宮傳贊には其蘊藉可知とあり溫の字はどれでもよいわけである。

(二) 禮曲禮に執友稱其仁也とある執友とは師を同ふし共に志を執るの友で、同窓の同志といふことだがこゝでは單にもだちと譯した。

(三) 落柘とは落魄のことである。魄は落魄の場合にはタクと發音する。史記酈

## 嬌娜

孔雪笠といふ生は聖人の裔で爲人蘊藉の、詩の工な人であつた。執友に天臺の令をして居るのがあつて函を寄して生を招んだので、生はでかけて往つたのであるが、生が往き着いた適、其の執友は卒つてしまつたので、生は落柘て國へ歸へることも不得なつた。で、菩提寺に寓をして、寺の僧の鈔録に傭はれ、やうやく其日を過して居た。

寺から西へ百餘歩り隔て、そこに單先生の第があつた。先生は舊家の公子であつたが大きな訟をして家は蕭條れ眷口は寡くなつたので、移して郷居をした。それで宅は遂う曠になつてしまつたのである。

大雪崩騰で、寂と行旅も無い一日であつた。生は偶と單先生の門を過つた。と、丰采の甚く都た一の少年が門から出て來た。そして生を見ると趨んで禮し、略と致慰問してから、乞降臨といつた、生は之の少年を愛らしく思つたので、慨然で從て入つた。屋宇は甚く廣くはなかつたけれど、處々には悉り錦の幕を懸け、壁上には古人の書畫が多に懸けてある。

生傳に家貧落魄無衣食業とある。

(四)張茂先といふ人は博學強記の學者であつたが、建安の從事となつて洞宮に遊び、ある人に出逢つた。其人が張に君は何年位讀書して居ますかと問ふと二十年以内の書は讀まぬが二十年以外の書はすべて讀みましたと答へた。其人の議論が俗人と超えて居るので大に感心し共にある處に行くと大きな石に門がある。或人は張をつれて石の中にはいつた。すると石の中には別に天地宮室があつた。一堂には一ばい書物があつた、それは歴史であるといつた。又一室には萬國史がいつばいあつた。奥

案の頭に一冊の書がのせてあつて、瑯環瑣記と籤(四)のしてあるのを翻ひらいて讀め一過とほしたが俱目所すべてみもせぬ未睹ことのみであつた。生は少年が單家の第に居るのを見て、第主だと意つたの即、亦に官閣などを審ただしもしなかつた。

少年は細くはしく生の行蹤けいれきを詰たづねて意憐きのどくにおも之ひ、設帳授徒てらこやを勸すすめるのであつた。生は嘆息たんそくして曰つた、

「霸旅之人たびがらすです。誰たれが作曹邱(五)くれませう！」

少年は曰つた、

「倘もし駑駘(六)だといつて見斥おことわりなさらなければ、願どうぞ拜門牆もんじんにしていたゞきたいのです」

生は喜んで、

「不敢當どうして、師せんせいなんかにはなれませんが、まあお友ともだちになつて請ください」

といつた、そして問たづねた、

「お宅やしきは何なんで久ひさしく錮とごしてお置おきになるんです」

少年は答こたへて曰つた、

「これは單たんさんの府おすまゐなんです。曩さきごろ公子わかさまが郷居むなかずまるをなさつたので、是以それで久ひさしく曠あきやだつ

たんです。僕は皇甫あかしといふ氏めうじで、祖せんぞから陝せんに住すんで居たのですが、野火のびで家宅いへが焚やけてしまつ

たので、暫しばらく此第このやしきを借かりて安頓おちついた譯わけなんです」

の一室は大そう高く  
て二匹の犬が番をし  
て居た。張がわけを  
尋ねると其人のいふ  
には。この中にある  
書物は玉帝の紫微金  
眞七暎丹の書物であ  
る。二匹の犬は龍が  
化けて居るのである  
とのことであつた。  
張が諸室の書物を見  
ると皆な漢以前のも  
ので見も聞きもした  
いものが多かつた。  
で、いと楽しく見て  
歩いたが、貸してく  
れないかといふと、  
其人は君は馬鹿だれ  
と云つて小童に命じ  
て張を外につれてゆ  
かした。小童に此處  
は何處かと尋ねると  
此處は瑯環の福地で  
すと答へた。

(五) 楚の曹邱生と  
竇長君は仲よしであ  
つた。あるとき季布

生は始めて單ではないことを知つたのであつた。

晩に當ると甚歡しく談し合つた。そして第に留ることにきめ、共の榻で安らかに眠つた。

味爽く童子が来て室の中で炭火を熾した。すると少年は先に起きて内へいつた。生は尙だ被  
を擁へて座つて居ると僮が来て、

「太公が來になります」

と曰つたので、生は驚いて飛び起きた。ト、鬢髮の幡然な一の叟が入つて來て、生に向  
ひいと慙に謝を曰つた、

「先生、頑な兒をお見棄てなさらず、遂ろ教へて賜さることを御肯になりましたね。小子  
は初學で塗鴉のです、友故に勿以に行輩視之にしてください」

已乃錦の衣、貂の帽子、襪、履など各一事を進れ、生が盥櫛已したのを視乃、酒を命け、  
饌を進さした。几、榻、裙、衣など、何名ものか不知が、光彩射目なものである。酒が數

行かすると叟は杖を曳いて去つてしまつた。餐が訖だ。公子は課藝を呈した。それは皆  
な古文辭で、並う時の藝は無かつた。問ねると笑つて曰つた、

「僕は進取を求めないんです」

と。やがて抵暮た。公子は更た酌いで曰つた、

「今夕は盡歡みませう。明日は不許よ」

が曹邱は長者でないといふことを聞いて居るから交際しない方がよからうと思ふと寶君を諫めた。曹邱はさうとは知らないから、希布に逢ひたいから添書をくれと寶君に頼んだ、寶君は曰つた。季將軍は君を歓迎しない人だから行かない方がよからうと。けれども曹がぜひくれといふので添書をやつた。曹は人をやつて添書を先きに季布に送つた。で季布が大そう怒つて居るところへ曹が往つて挨拶していふには、楚の人はよく黄金百斤を得るよりも季布の一諾を得る方がよいといふが、君はどうしてそんな名譽を梁や楚に於て得て居るの

で、僮を呼んで曰つた。

「太公はお寢みになつたかい、未だかい」

「已うお寢みになりました」

「暗と香奴を喚んで來で」

僮は去つたが、先に繡のした囊に琵琶を入れて持つて來た。少頃して一の婢が入つて來た。紅粧をして艶絶な女である。公子が湘妃をお弾きと命けると、牙の撥で句動はじめたが、激揚い調子が哀烈れで、その節拍が夙聞いたものとは不類つて居た。公子は又巨な觴を命けて行酒をした。三更になつて始罷たのである。

次日は早く起きて共に讀んだが、公子は最う慧で過目成誦へ、二三箇月の後には命筆警絶るやうになつて居た。五日目には一度酒を飲むことに相約し、飲む毎に必と香奴を招ぶのであつた。一夕、酒酣氣熱つてから香奴を注目して居ると公子は已う其意を會つて曰つた、

「此の婢は老父が拳養てるんです。兄が曠邈無家にいらつしやるんで、我は夙夜兄の代りに籌之して居るんです。行當君の爲めに一佳偶を謀しませう」

生は曰つた、

「果に惠好んなら必ひ香奴みたいなのをね」

公子は笑つて曰つた、

ですか。且君と僕とは同じく楚人ではありませんか、僕が君の名聲を天下に擧げるといふことも思ふにいいことではありませんか。で、季布は大そう喜んで數ヶ月間曹を大事にして置いたといふことである、それで茲には曹邱となるとあるのを吹聴と譯したのである。

(六) 楚辭に乗、駑駘而驅馳とある、駑とは駘の劣つたもの。

(七) 塗鴉といふのは頑是ない子供が書物は墨を塗りたくつて鴉のやうにまつくろくすること、蘆同が其子の添丁に示すの詩に忽來案上翻墨汁、繪沫詩書如飛鴉、父憐母惜擱不得、卻

「君は誠に見る事が少くて怪しむことが多いといふものです。これで佳いのなら君の願ひは亦易足ですよ」

居半載た。生は翱翔郊郭うと思つて門まで至く則、双の扉は外から扃めてあつた。問之ると、公子は曰つた、

「家君は交游が紛意念のを恐れ故、お客を謝つてるんです」  
生は之に安じて居た。

時も盛夏で溽熱かつたので、齋を園亭に移し相かはらず勉強して居た。ト、生の胸間が桃の如に腫起つて、一夜のうちに盃のやうになり、痛楚さに呻吟き苦しむので、公子は朝夕省視ふのであつたが、孔は眠食俱廢に苦しんだ。

又數日か経つた。創は劇くなつて、益す食飲が絶になつた。太公もやつて至たが相對つて大息するばかりである。公子は曰つた、

「兒、前夜、先生の清恙は妹子の嬌娜が能療之と思つたもんですから、外祖母の處へ人を遣つて呼ばしたんですけれど、何していつまでも來ないんでせう」

俄、僮が入つて來てさう曰つた、

「娜姑がお至になりました。姨さまも松姑と同にお至になりました」  
父子は疾趨で内に入つたが、少間すると妹を引て來て生に視はせた。年は約十三四だら

生痴笑令人嗟、とある、それから小兒のことを筆沫詩書といのである、ここでは塗鴉をできぬと譯しておく。

(八) 古諺に少所見多所怪、見臺駝以爲馬腫背といふことがある。

(九) 説文に外閉之關也とある。

(一〇) 漢の武帝の宮人に美人があつた、年が十四で玉膚柔軟吹氣如蘭であつたとある。

う。嬌波流慧い細柳生姿な女である。生はその顔色を望見と、頻りに呻いて居たのが頓と忘れたやうになり、精神も爲之に一爽としたのであつた。公子は便言た。

「此兄は良いお友だちで、不啻胞うにおもつてるんだ。妹子好醫之げ」

女は、乃と、斂羞容て、長い袖を揜げ、榻に就て診視した。把握之間に、蘭にも勝るや

うな芳氣が覺た。

女は笑つて曰つた。

「宜有此疾です、心脈が動じて居ますもの。然し、症は危いけれど可治わ。但だ、膚に

きた塊りは已う盈大きくなつて居ますから非伐皮削肉不可んわ」

乃、臂上にはめて居た金の釧を脱して患部に置き徐々に之を按下ると、創は一寸許り突

起つて釧の外にはみ出した。而して根際の餘腫も盡り束在内つてしまひ、盃の如に潤がつて

居た前とは似もつかぬ様とはなつた。乃、女は一の手で羅の衿を啓き、佩びて居た刀を

解した。紙よりも薄い刃である。そして釧を把ち、刃を握り、輕々附根から割つてゆくと、

紫いろの血が流れ溢れて牀席を汚染るのであつた。けれども生は嬌かな姿に近づいて居る

うれしさに、其の苦しみを覺へないばかりでなく、割事が速く竣んで久く俛傍なくなるのを

恐れて居た。

未幾く腐つた肉は割斷られた。團團然で、樹から削りつつた瘤のやうであつた。女は又か

ら水を呼せて割つた處を洗ひ、口から彈ほどの紅い玉を吐き出して肉の上に置いた。そしてそれを按令旋轉した。纔た一周りで熱火蒸騰へ、再周りで習々と痒く作り、三周りで已ら遍體の清涼しさが骨髓まで沁入るやうであつた。女は丸を收つて咽に入れ、

「愈り矣！」

と曰つて趨歩で出ていつた。生は躍起きると走けだして謝を述べた。沉痾は失なつた若に癒つて居た。而ども女の容想に懸相して苦不自己、自是は卷を廢て、癡座わつたまゝ無聊頼うにして居るのであつた。公子は已う窺之つて、さう曰つた、

「弟、兄の爲めに物色して佳い偶を得られましたよ」

「何人です」

と問ねると、

「亦り弟の眷屬なんです」

と曰つた。生は良や久しく凝と思へて居たが、但だ、

「勿須なさい」

と云つたまゝ、面壁いて、

「會て滄海を経て水と爲し難く、巫山を除却けば是れ雲ならず」

と吟んだ。公子は會其指つて曰つた、

(一) 後漢嚴光帝傳に思其賢乃令以物色訪之とある。顔形で尋ねることである。

(二) 唐の元稹が妻に死なれた時に作つた五首の詩中に此句がある。滄海の水に比すべき水は無く、巫山の雲に比すべき雲はないと云つて、亡妻韋氏に比すべき女はないといふ心を詠じたのである。

(二三) 説文に黛畫眉也とある、かきまゆなのだが、ここでは單にまゆとした。

(二四) 東昏侯が金で蓮花をつくり潘妃をして其上を歩ませ、此歩々生蓮花也と曰つたといふことがある又李後主の宮嬪の宥娘は舞が上手であつたので、後主は高さ六尺の金蓮を作り宥娘の脚を帛で捲かせて細い新月の形として舞はせたといふことである。

(二五) 昏禮に合香而飲とある香とは瓢を半分に切つたもので夫婦で其一つづつを執るのが婚禮の古式である。

「家君は兄の鴻才を仰慕つて常附爲婚姻とおもつて居るんです。但止一の少妹は齒が太り稚くてしかたがありませんが、姉女の阿松といふのは十七で頗不粗陋です。如し不見信はれるんでしたら、松姉さんは日のやうに園亭に来て涉んで居ますから前の廂で伺けば望見れますよ。」

生は公子の教の如にした。ト、果して嬌娜が麗しい人と偕にやつて至た。畫黛彎蛾、蓮鉤蹴鳳、嬌娜と伯仲やうであつた。生は大そつ悦んで、公子に作伐を請んだ。

翌日である。公子は内から出て來ると賀を述べて曰つた、

「諸矣」

乃て、別院の掃除をさせ、生の爲めに成禮げてくれた。是の夜、鼓吹の鬨咽ことは、塵落漫飛かとあやしまれ、女のやうすは仙人を望中るかの似であつた。衾幄を同にして廣寒宮殿は未必在雲霄とさへ疑つた生が、合香のすんだ後、甚愜心懷かつたことは勿論である。

一夕、王子は生に、

「切磋していたゞいた惠は無日可以忘之せんが、近ろ單公子は訟が解で歸つてこられることになり、宅が素といつて甚く急いでいらつしやるので、此を見棄て、西の方へ行かうと意ふんです。勢難復聚になりました」

と謂曰て離緒縈懷むのであつたが、生が願從之而去といふと、公子は郷里へ還れと勧めた。



生せいが之それを難いがると、公子わかさまは曰いつた、

「勿しんばい慮しなくてもいゝですよ、可お即くつて送あ君け行ますから」

無ま何もなく、太公らうじんが松しょうじやう娘やうを引つて出でて至きた。そして黄金きんひやく百兩れうを生せいに贈くれた。公子わかさまは左さ右いうの手てで夫ふう婦ふの手てを把とり握り、眸めを閉とぢて勿み視ないやうにしろと囁いひつけ、飄へう然ぜんと空そらを履ふみつゝ行ゆくのであつた。生せいは但ただ耳みも際もとで風かぜが鳴なるのを覺おぼえて居ゐたが、久ひさ之しくしてから公子わかさまが、

「至き矣ました」

と曰いつたので目めを啓あけると、果はして故里ふるさとが見みえて居ゐた。生せいは始はめて公子わかさまが人間にんげんでないことを知しつたのである。喜よろんで家門もんを叩たたくと、母ははおやは出おも非ひ望がけず生せいが歸かへつて來きたらうへに美うしつくい婦よめまで睹みて、夢ゆめかとはかり喜よろぶのであつた。方で、共ともに忻よろ慰こんで居ゐたが、公子わかさまの方ほうを回ふり顧むくと、いづの間まにか逝いつたのであつた。

松しょうじやう娘やうは姑しうとめに事つかへて孝行かうかうであつた。それで艶うしつくい色きれうと賢かしこい名なとは遐おち邇こちに聲聞きこえわたつた。後のち生せいは進士しんしに擧あげられ、延安えんあんの司李さいはんくわんとなつた。

かくて生せいは携家うちぢやうで赴任ふにんすることとなつたが、母ははおやだけは道みちが遠とほいからといつて行ゆかなかつた。赴任ふにん後ご松しょうじやう娘やうは一男だんを擧うんで名なを小宦せうかんとつけた。其そのうちに生せいは直指じぢゆんあんに忤さつたので官くわんを罷よされた。けれど窒礙さしさわりがあつて郷里くりにへ歸かへることが不得でかつたので、矢張やはり延安えんあんに居ゐたのであつた。

(二六) 亦司理とも  
書く、廣雅に臯陶爲  
李官治刑獄とある、

(二七) 杜氏通典に  
漢公卿百官表侍御史  
有繡衣直指者出討奸  
猾理大獄云々とあ  
る。明では御史を清  
初では巡按を直指と  
稱した。

(二八) 傳に一宿曰  
宿再宿曰信とある。

あるとき 偶、郊野で獵をして居ると、驪の駒に跨つた一人の美くしい少年に出逢つた。頻々に瞻顧るので、細視る則、それは皇甫公子であつた。轡を攬り驂を停めて、二人はかつ悲しみかつ喜んだのである。公子は生を邀へて一る村に至つた。樹木濃昏く陰翳天日、陰氣なところではあるが、入其家と、金漚浮釘で宛然の世家である。妹子を問ねると、嫁にいつたし、岳母は已う亡つたといふことであつた。二人は深く感悼ひ、生は經宿つて別去つたが、偕妻同に返つてゆくと、嬌娜も至てゐて、生の子どもを抱とり、掇提而弄ながら、

「姉々は吾たちの種を亂したのね」

と曰つた。そして生が曩の徳を拜謝すると、笑つて曰つた、

「姉夫は貴矣をなさつたのね。創口は已う合がつてしまつたのに、未だ痛みを忘れない

の？」

妹夫の吳郎も來て拜謁をすまし、(二八) 信宿つ乃、去つていつた。

一日、公子は憂らしい顔色をして居たが、やがて生に謂ふのだつた、

「天降兇殃つて來たのですが、能相救くださるでせうか」

生は何事か知らないけれど、但銳自任した。すると公子は趨いで室を出ていつたが、一家の人を俱な招できた。そして堂上に羅ばして生を拜ました。生は大そろ駭いて亟いで問いた。公子は曰つた、

「余は人類では非のです。狐なんです。今度雷霆の劫があるんですが、君が以身赴難てくだされば一門のものが可望生全るんです。若し然してくださらぬのなら、請ぞ子どもを抱て行つてください無相累けません」

生は生きるも死ぬるも共にしよう矢つた。乃で公子は生に劍をもたして門に立たせ、囑んで曰つた、

「雷霆が轟撃ても勿動でゐてください」

生は如教にしてゐた。ト、果して陰雲晝暝つてきて、やがて礮の如に昏黒になつてしまつた。舊の居を回視ると、無復閑閑て、惟だ高い冢が歸然、無底ぬ巨きな穴があつた。方錯愕いてゐる間一聲の霹靂山岳を擺簸ひ、急雨狂風、老樹も抜かるゝのであつた。生は目眩み、耳聾ひながら、屹と不少動にゐた。忽、繁煙が黒い絮を亂したやうに渦く中に、啄の利つた、爪の長い、一つの鬼物があつて、穴の中から一人の人を攫んで出て來た。そして煙に隨いて直と上つて行くのを瞥りと觀ると、衣や履が嬌娜に似て居るやうに念はれる。乃で急躍離地るやいなや、劍でハタと撃ると、隨手に地に墜落た。忽ち山が崩れるやうな響がして、雷が暴烈てきた。生はばつたり仆れて遂斃つた。

少間すると晴霽れた。嬌娜は已う自で蘇へつて居たが、旁に生が死んでるのを見ると、  
「孔郎は我を助けるために死んだんだわ！  
我何うして生きてゐられよう！」

と曰つて大そう哭いた。松娘が出て来て共に生を昇いて室に歸つた。嬌娜は松娘に生の首を捧たせ、兄には簪で生の齒を撥かせ、自は生の頤を撮ち、舌でもつて紅い丸を度入た。又て吻を接けて之を呵んだ、紅い丸は氣に隨がつて喉に入り、格格と響が作てゐたが、移時すると醒然いて蘇へつた。眷口のものが、前に滿居るのを見て、夢から寤めた人のやうに恍してゐた。於是て一門の人々は無事に團圓ることができ、驚定いて喜びあつた。生は幽壙などは久く居るところでは無いからと曰つて、同に里へ旋らうと議した。滿堂く交賛した。其中で惟だ嬌娜だけはいと不樂しげな様子をして居た。生は吳郎も俱に來て請ればいゝではないかといつた。又ども翁さんや媪さんが幼ない子どもを肯離さないだらうとも慮つて終日議が不果かつた。

忽、吳の家の一小奴が汗を流して氣促きやつて至た。驚いて致研語則、吳郎の家でも同じ日に劫に遭ひ、一門俱に歿つてしまつたのであつた。嬌娜は頓足して悲傷しみ涕不可止てゐるのを、共で慰め、同に郷里へ歸ることが遂う決つたのであつた。生は城内へ入つて數日か尙當き、連夜趣装をして遂う歸つていつたが、既歸つてからは閒な園に公子を寓はせたのであつた。公子は恆も門を闢め、生や松娘が至たときだけ始と扁を發くのであつた。生は公子兄妹と碁をうつたり、酒を飲んだりして談謙み、まるで一家の若であつた。

## 妖術

(一) 唐書に安祿山作胡旋舞帝前疾如風とある。

(二) 殿試といふのは進士の試験のことで宮殿に於て行はれるから殿試といふのである。

于といふ公は、少いときから任侠なたちであつた。拳勇が喜で、力といつたら、二つの壺を持ちながら、旋風の舞を高に作し得るほどであつた。

崇正年間のことである。于公は殿試を受けに都に滞在して居たが、僕が疫になつて起きられなくなつたので、患之して居る會ら、善な卜者が市に有つて、人の生死を見決めるといふのを聞き、僕に代つて問之ようと思つて既至と、于公が未言ないうちに卜者が

「君は僕の病について欲問のでは莫んか」

と曰つた。于公は駭いて應之といつた。卜者は曰つた、

「病者は無害だが、君が危ですな」

于公は乃で自のために卜をたのんだ。卜者は卦を起てて、愕然て曰つた。

「君は三日で當死！」

公は良久こと驚きもし詫しみもしたのであつた。すると卜者は從容らつて曰ふのであつた。

(三) 周禮女巫巫の註に卻變異曰襪とある拂ひのぞくことである。

(四) 後漢律歷志に孔壺爲漏浮箭爲刻下漏數刻疏之曰天河其廣長容水箭箭有四以木爲之長三尺有五寸著時點於天河中晝夜更用之とある。水漏即ち水時計で今の午後七時から翌朝の五時迄即ち十時間を夜漏として五分し、二時間を一漏として數へるのだから一漏向盡といへば九時に垂んたる頃である。

(五) 唐の李日知傳に日知獨平寬無文致嘗免一囚死少卿胡元禮執不可曰吾不去曹囚無生理日知曰僕不

「鄙人に小か術が有りますすじや。我に十金を報されば、之を襪つてあげませう」  
しかし公は自念へた。生死が已に定つて居るのを、豈して術で解くことが能ようぞと。で、  
應せず起あがつて出ようとすると、卜者は曰つた、

「此な小な費を惜しんで後悔を勿やうにさつしやるがよい」  
公を愛しむ人たちは皆な公の爲めに懼して、囊を罄にしても哀之みたまへと勧めたので  
あるが、于公はそれを聽かなかつた。

倏忽に三日が至た。于公は端と旅舎に座りこみ、こゝろ靜かに様子を覘がつて居たが、終日は恙も無いのであつた。

夜に至つた。戸を闔め、燈を挑るくして、劍に倚つて危と座つて居たが、一漏向盡になつても更ら死法でも無いので欲就枕と意つて居る忽、窓の隙間に窸々と聲が聞えた。急いで視之と、一の小人が戈を荷いで入つてきた。それが地に及く則、ただの人の如な高さになつて居た。于公は劍を捉つて起ちあがり、急に之を撃つたけれど、飄空と飛んだので未中なかつた。すると遽ち小さくなつて復た窓の隙を尋すのは欲遁出と意ふのらしい。公は疾く之を研つた。應手ともにも倒れた。燭をかざす則、紙の人が腰斷にやられて居た。公は臥すに又座つて待つて居るのであつた。

踰時ほどたつと、一物窓から入つてきた。鬼の如に怪獰なものである。それが地に及た纔

去曹囚無死法とある。こゝでは死法なしにさうと譯しておく。

(六) 嬌娜の注にあり、ここでは戸と譯しておく。

のところを急に撃て断而爲兩つたが、蠕うじ動いて居るので、復起るのを恐れて連撃にした。劍々に皆な中つた。其聲が爽かでないやうなので、審視る則、それは土偶で、片々已碎けて居た。

於是、窓下に座を移し、久之く隙中を目注て居ると、窓の外で牛の喘ぐ如な音が聞え、窓の櫃子を推す物がある。房壁が震揺して今にも傾さうな勢だ。公は覆壓されるより外に出て闘つたはうがよからうと思つた遂著然と扇をあけて、奔り出た。見ると一の巨きな鬼が、その高さは簷と齊しく、煤のやうな黒い面、黄ろい光りに閃爍やく眼、上に衣無く、下に履無く弓を手にし、矢を腰にして居るのが、うす昏い月かげのなかに立つて居た。公が駭くまもなく、鬼は矢を彎つた。公は劍でもつて矢を撥つた。矢は墮ちた。欲撃之る則、又彎つた。公は急いで躍りあがつて、それを避けた矢は壁を貫して戦戦と聲がした。鬼は甚く怒つて佩刀を抜き風の如に揮りまはしつつか公を望んで力いっぱいに劈けた。公は猿のやうにつき進んだ。刀は庭石に中つて石が断れた。公は鬼の股間に出るやいなや、鬼の中踝を削つた。鏗然と聲がした。鬼は益怒つて雷の如に吼へながら、身を轉じて復た刹りつけた。公は又伏身になつてつけ入つた。刀はサツと落ちて來て公の裾を断りとつた。公は脇の下に及たので猛まかせに斫ると、亦り鏗然と聲がして、鬼は仆而た。公が亂撃之にすると、柝のやうな硬い聲がしたのであつた。燭で照らすと、則は人の如な高大さの一の木偶で、弓矢を腰際に

纏まとつて居ゐたが、刻ほりといひ、晝いろどりといひ、猙獰おそろしきを極きはめたもので、劍けんで撃きりつけた處ところは皆すべて血ちにまみれて居ゐた。

公こうは秉燭あかりをつけて旦よあけを待まつたのであるが、鬼おになどは皆みんなな卜人うらなひが遣よこしたので、人ひとを殺ころしておいて、其術そのじゆつを神聖しんせいなものにしようとしたのであることを方やつと悟さとつたのであつた。

次つぎの日交知ひしりあひに徧告つげしして、與共いっしょに卜うらなひの所ところに詣いつたが、卜人うらなひは遙とほくから公こうを見みるやいなや、瞥ちらと見みえなくなつてしまつた。すると或あるひとが

「此これあ翳形えいけうの術じゆつだ。犬いぬの血ちで破やぶることができるとよ」

と曰いつた。公こうは其言そのことばの如とほりに戒備よういをして往ゆくと、卜人うらなひは又前またまへの如やうに匿かくれたので、急きふに犬いぬの血ちを立たつて居ゐた處ところに沃そそいだ。但と、卜人うらなひは頭あたまも面かほも犬いぬの血ち模糊だらけに爲なり、鬼おにの如やうに目めばかり灼ぎら々ぎらして立たつて居ゐた乃ので、執つかまへて有司やくにんに付わたして殺ころさしてしまつた。



(一) 學使とは學政使のこと、試験委員長といつたやうな人。

(二) 嬌娜の註にある。

(三) 擊節とは几を撃つて節を爲すことであるが、この場合ではハタと几をうつたぐらゐのところ。

(四) 杜甫の詩に文章憎命達魑魅喜人過とある。

(五) 左思の蜀都の賦に鳥鍛羽とあつて、注に鍛は殘也とある鳥の羽毛が脱け残つて高く飛ぶことの出來ぬあはれた姿をいふのである。

## 葉生

名や字を失れたが、淮陽の葉生は、文章といひ、詞賦といひ、冠絶當時だつた而ど、所如つても不偶で、困於名場るのであつた。

會ら、是邑の令になつて來た、關東の丁乘鶴といふひとが、その文章を見て奇之がり、召せて與語つたが、大く悦つたので、使即官署受燈火たうへ、時をり錢や穀など賜つて其家を恤けたのであつた。

そのうちに科試のときが値たので、公は學使に游揚しておいた。すると葉生は冠軍を領つた。サア公の期望は纂切なもので、闈の後で文を索せ、之を讀むと擊節つて稱嘆たのであつたが、不意も時數限人、文章憎命かつたとみへ、榜既放されたら、依然り鍛羽だつたので、生は嗒喪して歸つてきた。そして己を知つてくれたひとの期待に負いたことを愧ぢ、形銷れ骨立つて、癡り木偶の若になつてゐると聞き、公は召之來て慰之たが生はただ零涕不己なので、公は憐れにおもひ、考が満んだら都に入かう、携與俱に北にむかはうと相期した。

(六) 莊子齋物論に  
塔焉若喪其偶とあ  
る。

(七) 禮檀弓に子之  
病革矣とあり注に革  
は亟と同じ急なりと  
ある。

(八) 書の堯典に期  
三百有六旬有六日以  
閏月定四時成歳とあ  
る。

(九) 邑庠に入ると  
いふのは生員となつ  
たことである、童生  
が童試即ち第一州縣  
試、第二府試、第三

生は甚う感佩がつて、辭げて歸つていつたけれど、それから門を杜ぢてそとへ出なかつた。そして無何く疾になつて寝た。公はひとを遣つて絶えず問ねさせた。而し藥と百裏服んでも、殊う所効が罔かつたのである。

適ら公は上官に忤つて免されたので、解任て去ることになつた。で、生に函を致つたが、それには略ぼこんなことが曰つてあつた。

「僕が東に歸る日があるのに、遅々してゐる所以は、足下を待つてゐるから耳。足下が朝至れ則、僕は夕發つんだ」

之を臥榻にゐる生に傳すと、生は書を持つて啜り泣き、來使に寄語た、  
「疾が革くなつて遽には療り難いのですから、請ぞ先にお發ちください」

使は返つてさう曰つた。けれど公は去くに忍びず、徐に待之てゐるのであつた。  
踰數日た。忽、門者が、葉生が來ましたと通せた。公は喜んで生を逆へ、問之ると、生は

曰つた、  
「犬馬の病のために、夫子に久も待つて勞てるのが、萬慮不寧かつたんですが、今や

幸ひにも可從杖履るんです」  
公は、乃で裝束をととのへ、戒旦、里に抵いた。そして師として生に事へよと子に命け、

夙夜與俱にくらさせた。

學政試の三段の試験に合格すると、生員の身分を取得し、當該府州縣の學校に入るるのである。

(一〇) 呂氏春秋に道之眞以持身其餘緒以爲國家とある。

(一一) 楚辭卜居に黃鐘毀棄瓦釜雷鳴とある、ここでは黃鐘の如き立派な手腕をといふ意、十二律中の黃鐘の意ではない。

(一二) 史記に項羽曰此天亡我非戰之罪也とある、葉生は、今までの落第が學問の罪ではなく、試験運が無かつた爲だといふことを知らせればそれで満足だと云つたのである。

(一三) 白紵は色の無い衣服即ち普通人の

公子は名を在昌といつて、その時年十六だつたが、尙だ文章をつくることが不能かつた。然ど、絶う慧で、凡の文藝は三度も過む輒、無遺忘かつたので、期歳居るうち便、落筆ると文章が成るやうになつた益之、公の力もあつたので、遂う邑痒に入れた。で、生は生平から舉人の業に所擬しておいたのを悉り録いて授讀せたが、闈中の七題が並な無脱漏ので公子は亞魁に中ることができた。

公は一日生に謂つた、

「君は餘つた緒で、遂う使孺子成名させた。然にじぶんの黃鐘を奈何長でも棄てておくのだ」

生は曰つた、

「是が殆有命！ 公子の福澤を借りて、じぶんの文章の爲めに氣焰を吐き、天下の人たちに、じぶんの半生の淪落が、非戰之罪かつたことを知らしてやれば、願亦足矣。且に士は一人に知つてさへ得へば憾むことは無いのです。何に、必ひ抛却白紵め乃、謂之利市しなくともいいんです！」

しかし公は、生が久も客になつてゐては、歳試を悞なふだらうと恐して、勸令歸省るのであつたが。生の慘然不樂なやうすをみては、強ゆるに忍びなかつたので、公子に囑け、都に至つて生の爲めに納粟せたのであつた。

着てゐる衣服、利市は王禹偁の詩に閑思蓬島會神仙三百同年最少年利市襪衣抛白紵風流名字寫紅箋とあるところから襪衣を意味し、ただの着物を脱ぎすてて金モールの服を着なければならんといふこともありませんヨと云つたのである。

(一四) 粟を官に獻納して身分を買ひ或は罪を贖ふこと、此場合では多分納粟して秀才となつたのであらうが、みぶんをかはせと譯しておく。

(一五) 南宮は禮部のこと、禮部の試験に捷利を得るといへば、進士となつたこと。

(一六) 監とは國子監のこと。

公子は又た南宮のしけんが捷り、禮部の主政となつたので、生を携て赴監した。そして與俱晨夕した。

躡歲、生は入北闈つて竟う領郷薦つた。會ら公子は典務で南河に差はされることになつた因、生にそつ謂つた、

「此の去は離貴郷不遠んですよ。先生は奮蹟雲霄なさつたんですから、錦をきて還るのも爲快ではありませんか」

生も亦り喜んだ。で、吉を擇んで就道たのであつたが、淮陽の界に抵くと、僕や馬やを命けて生の歸國を送らせた。

生は門戸の蕭條れてゐるのを見て、意のなかで甚く悲惻んだ。そして逡巡ながら庭中に至つた。そのとき妻は鋏具を携て出てきたが、生を見るとそれを、擲りだし且、駭き走げた。生は凄然に曰つた、

「我は今では貴してゐるんだよ。三四年不觀ばかりなのに、何遂頓不相識たんだ？」

妻は遙から謂曰た、

「君が死んでから已う久いことですのに、何復言貴いじやありませんか。君の柩を久く淹てあるのは、家が貧で、子が幼かつたからなんです。今では阿大も已う成立になりまして、行將に窳窳をトめようと思つてゐるんです。怪異ことを作て、生きてる人を嚇が

(一七) 北京に於ける監生の試験を北闈といふのであるが、ここでは試験が通つてと譯しておく。

(一八) 郷薦を領ずとは舉人となつたこと

(一九) 典禮の事務

(二〇) 左傳襄十三年に惟是春秋窀穸之事とある、窀は厚いこと、穸は夜のこと、限りなき長夜とは墓を言つたのである。

(二一) 説文に蛻蟬蛇所解皮也とある。

(二三) 漢の武帝の時代に孝行で廉正なる人を各郡國から毎年一人づゝ擧げさせたのが孝廉のはじめである、清では舉人を孝廉と稱した。

(三三) 泮に遊ぶとは童試に及第して秀才となつたこと。

らせ勿いでください！」

生はそれを聞くと撫然惆悵に逡巡ながら室に入つたが、靈柩を見ると撲地而滅たのである。妻が驚いて見之と、衣や、冠や、履舄などが、蛻委になつて居るので、衣を抱いて大そう慟き悲哭んだ。

子は塾中から歸つて、門に駟が結いであるのを見たので、所自來かを審し、駭いで奔けこんだ。そして母おやに告つた。すると母おやは涕を揮きながら告訴した。又て從者に詢ねて始と顛末が得つたのであつた。

從者は返つてきた。公子は之を聞くと涙を墮垂膺し、卽に駕を命け、哭諸其室た。そして出囊して喪を營み、孝廉の禮遇を以て葬つたらうへ、子に厚い遺ものをした。そして師を延で教讀せ、學使に言つておいた。子は逾年になつて遊泮となつた。

# 成仙

(二) 公沙穆が大學に居たころ資糧が無かつたので、服を變じて吳祐といふ人の爲めに賃白をやつて居た、所が祐が色々話して見て大變驚き遂に杵臼の間に交りて結んだといふことが後漢書に出て居る。

(三) 左傳に牛を牽いて人の田を蹊ぐといふことが書いてある蹊とは過ぐることである。

文登の周生は少い時から成生と共筆硯で杵臼交であつたが、成は貧乏だつた故、終歲常、周の依になり、周のはうが以齒爲長なので周の妻を嫂さんと呼つてゐた。そして節序には登堂きて一家の如くに親んで居たところが、周の妻が子供を生み産後暴かに卒で了つたので、其繼に王氏を聘れた。生は少し故があつて未嘗請見つたのである。

一日のことである。王氏の弟が姉さんを省に來たので内寢で宴をして居るところへ適くり成がやつて來た。家人が斯くと通白いだから周は邀へるやうに命けたが、成は失禮だからといふので入らずに辭去しまつた。周は席を外舎に移し成を追かけ而、一緒に還り甫と座つた即へ人が來て、

「別業の僕が邑の宰に捕まつて重く答たれて居ります」

と白げた。先是黄といふ吏部の役人の家の牧傭が牛を牽ばつて周の田を牛蹊し、周の僕と相話をした。さうして奔だして主人に告げ僕を捉へて官に送つて了つた遂、被答責たの

である。周は詰得其故て大う怒り、

「黄の牧猪奴！ 何敢爾したな！」

其の先世は僕の大父の服役だつたんだ。促得志た乃

人も無げな振舞をする」

と氣填吭臆忿て起ち上がつた。さうして黄の家に尋かけようとした。成は捺止めて

「マア待ちたまへ、強梁の世界に早い白いはないのである。況や今日の官宰は半ば強寇

で、刀や弧をひねくり廻はさない者はないのだ」

といつたが、周は不聽かつた。成が再三諫めて泣をさへ下したので、周も乃で止まつたが、

怒は終に釋けず、轉側しながら旦に達ると、家人にさう謂つた

「黄は我を欺にしてゐる。我の仇である。併し姑置之して、邑令は朝廷の官で勢力家の

官ではないのである。縦争があれば其兩造を調ぶべき筈なのに、嗾けられた狗のやうに

片方ばかりを責めるのは何だ！ 我もあいつの傭を呈治へ、邑宰が何ういふ處分をするか見

てやる」

と、大した劍幕のところへ家人が皆な慫慂たので計遂決め訴狀を具つて邑宰の所へ出かけ

て赴つた。すると、宰は訴狀を裂いて、擲りだした。周は大怒り宰を語侵つた。宰は慙ぢ

もし悲りもし、周を逮繋つた。

成は辰後て周を尋ね、始めて周が城内へ訟理にいつたことを知り、勸止に急奔たけれど其

(三) 強梁といふ字は莊子の山木篇にも後漢禮儀志にもある、山木篇の場合では強力者のことで、而も惡意を持つて居る。

(四) 原被兩造などと今の法曹も使つて居るが、兩造とは兩争の皆至ることである。

(五) 圜は牢、圜は止である、夏では鈞臺、殷では姜里周では圜土、圜圜は秦の獄名である。

(六) 韓詩外傳に郷亭の繫を犴と曰ひ朝延のを獄といふ、犴は犬のことで犬は能く守るから牢獄のことを犴といふといふことが出て居る。

(七) 死罪を大辟といひ、刑罪を小辟といふ。

(八) 讞とは罪の疑はしきを調べることである。

時にはもう圜圜の中に在つたので、頓足したけれど無所爲計つた。時に三人の海寇を獲たので宰は黄と相談し賂をやつて彼等に囑つけ、周の同黨であると捏り言を云はせ、その詞を據にして申告し、周の頂衣を剥ぎ取つて慘酷に榜掠した。成は獄に入つて周に遭ひ相顧みて悽酸んだのであるが、叩闥を謀ると、周はいつた、

「自分の身は重犴に繋がれて籠に在る鳥のやうなものであるし、弱な弟が有るけれどただ囚飯をするぐらゐなことしか出来ないんだ」

成は鋭身んで、自任せ

「是は予の責任だ。困難を救ふに急でなければ、鳥も友人は用らんよ」

といつて周に別れ乃、叩闥に行けた。周の弟が贖をしようと思つて來た則、もう去かけてから時を経てゐたのであつた。

成は都に至たけれど控へる無門入いので困つて居ると、天子が獵にお出になるといふ相傳があつた。そこで預から木市の材木の蔭に隠れて居る俄、お馬車が過つたので、伏舞で哀み號んだ、さうして遂に得准になり自分は驛送りとなつた。そして事件は部院の審問に附せられ上奏されたが、其間に十月餘りも閱つたから周は已に誣に服して辟を定められるところであつた。部院では御批に接して大に駭ろき、計び周を提だし讞を調べるといふこととなつた。黄も亦た駭いて周を殺さうと謀り、監者に賄賂を送り飲食を絶つて了つた。周の弟が餽



ものなどを持つて問に來ても苦く禁じて拒のである。それで成は又た部院に赴つて、不法を聲て、始と提問を蒙けることになつたときには業已飢餓のために起てなくなつてゐたので、院臺は怒つて監者を杖斃させた。黄は大そう怖れて數千金を納め營脱くふうを囑んだ。以是朦朧題免でしまつた。宰は法を枉げて監者を流刑に處した。周は放免となつて家に歸つた。是より益す成と肝膽相照す仲となつたのである。

成はこの訟繫以來世間に對する情が盡く灰となり、周を招んで一緒に世の中から隠れようとしたけれど、周は少い婦に溺れて居たので、迂といつて一笑に付して了つた。成は言はなかつた而ども其意は甚と決まつて居たのであつた。

別れてから幾日か成が至ないので、周の使が成の家について探すと、成の家人は周の所に居るのだらうと思つて居たといふ。兩方に見えないので、始めて疑ひを生じたのである。周は心に異つたことのあるのを知り、人をやつて天下の寺觀壑谷殆んど至らぬ隈もなく成の踪跡を物色さした。又時には成の子に金帛を送つたりして生活を郵けてゐた。

又て八九年してから成が忽然と自分でやつて至た、見れば黄巾、鞞服、岸然な道士の貌である。周は大に喜び臀を把つて曰つた、

「君は何處へ往つたんだ、徧り僕に搜尋さしたね」

成は笑つて、

(九) 唐の李播といふ人は官を棄て道士となり黄巾子と稱した、また王恭といふ人は鶴氅を著て居た。それで道士のこゝとを黄巾或は鶴氅の人といふのである。

「イヤ孤雲の如く野鶴の如く、定つた棲所もない。併し別れて後幸ひに頑健だヨ」  
周は酒の支度を命けて間濶のことを略と道し道士の服装を變へさせようとしたが、成は笑つて應じない。そこで周が、

「愚だ哉、君は何故敝屣のやうに妻子眷族を捨てたんだ」

といふと、成は笑ひながら、

「イヤ不然。人は僕を捨てようと思つても、僕は誰れを棄てることが能よう」

といふ。棲んでゐる所を問と勞山の上清宮に居るんだと答へる、さうかうする中に夜になつたので並んで寝たが、夢に成が裸になり胸の上に伏しかかつて氣不能息いので訝しんで何爲るんだと問ても殊に返辭をしない。忽、驚いて眼が寤た。成を呼んで見るが應がない。座つて索つて見ても杳然として何處へ往つたか分らない、移時してから始めて自分が成の榻で寢て居るのに氣が付き駭いて云つた、

「ハテ昨夜はそんなに酔つても居なかつたのに、何うして此なに顛倒たんだらう」

乃家人を呼ぶ。家人が火を點すと、豈圖らんや儼然の成の姿である。一體周は髭の多い質であつたが、手で撫でて見ると疏らなやつが幾莖もない。鏡を取つて自分で顔を寫し、

「オヤ、此に成生がある、ハテ自分は何處へいつたんだらう」

と訝つたが、即て大に寤り、

「これは成が術をつかつて自分を世の中から隠遁させ招としたんだ」

と氣がついた。そして内へ行かうと思つて入りかけたが、顔が違つて居るので弟が通さない。周は自分で自分を證明することが出来ない即、僕と馬とを命け成を捜しに出かけた。數日を経て、勞山に入ると馬が急にどん／＼駛け出して僕は不能及くなつたが、そのうちに一本の樹の下でやつと止つた。見ると羽客の往來する者が甚う衆い。其中の一道人が周を見ただので、成といふ道士は何處に居るのでせうと尋ねると、道士は笑ひながら、

「名前は聞き及んで居ます。何でも上清宮に居るやうです」

と言ひ已ると逕ちに去つたが周が目送つてゐると一矢之外で向ふから來る一人と何やら話しをして去つて了つた。やがて與言つた人が至た。乃と意外にも其人は同じ文社の生で周を見ると愕いていつた、

「數年晤はなかつたね、人の話しでは君は名山に入つて道を學んで居るといふことだつたが、今尙人間の仲間に遊戯して居たのかね」

周は今迄の異なことを悉しく述べた。友は驚いて、

「や、僕は今適遇之つたんだ、さうして君だと思つたんだ、去つてから間がないから未だ遠くは行かんだらう」

周は大そう異に思ひ、

(二〇) 燕の昭王がけらいの甘肅をお召になり長生久視の法を學ばうとして羽衣一襲を賜つた。それから道士を羽客といふやうになつたと拾遺記にある。

「自分の顔が分らんはずはないのに、怪しい哉！」

と云つて居るうちに僕が尋ねて至たので急におひ駛けていつたが無蹤兆かつた。

一望ば寥闊としたところで進退難自主い。併し自分の歸るべき家の無いのを念へた遂、成を窮追めようと決意めた。其中に山はだんだん怪険になつて馬に騎ることが出来なくなつた。遂に周は馬を僕に付して歸らせ、自分は迤邐つた山道を歩んで往つた。すると遙に一人の僮が唯獨り座つて居るのが見へた、趨り近づいて程を問ひ且つ告以故すと、僮は、

「私は成先生の弟子でございますから」

といつて周に代つて衣糧を荷ひ、導をして俱に行つた。星飯き露宿つて連行殊遠と歩ゆみ三日目に始めて至た。併しそれは世の所謂上清宮ではなかつた。時に十月であつたが、山花路に滿ち冬の初のやうではなかつた。

僮が内に入つて、

「お客様がお出になりました」

と報せると成が遠いで出て來たので、始と己の形を認めることができた。手を執つて中へ入り酒を出して謙語あつた。異つた彩の禽で其聲笙簧のやうなやつが、人に馴れて驚かず、そして時々は座上に飛んで來て鳴いて居る。甚く異だとは思ひながら、俗の念が切であつて流連もゐようといふやうな考へは少しもなかつた。

(二) 于思は髭の多い人のことである。

地下には蒲團が二つあつた。夫を曳き寄せて生と竝んで座つて居たが、二更後になつていろいろな心が俱り寂まつたと思ふ時、忽ち瞥然一盹んで何だか自分と成と位地が變つたやうな心地がした。疑之つて領下を撫でると故の如き于思であつた。既曙つて浩然返りたい氣がしたが、成が固く留めるので止むを得ず三日を越し、成が、

「少し寝たまへ、明日は早く君を送らう」

といふので甫めて交睫つた。そして、

「行装が已具つたよ」

といふ成の聲に目を覺まし、起て成に従つていつたが、行く所の道は殊り舊道とは違つて居た。無幾時里居が在望中た。成は路の側らに座つて周に自分で歸れといつた。周は成を連れて行かうとしたけれど強ひ得なかつた因、踽踽家にたどり至き門を叩いたが、應をする者がなかつた。不圖牆を欲越と思ふと身はさながら葉の似に飄へり、一躍に飛び越した。さうして幾重かの垣を踰えて始、臥室の外に抵ると燈燭が熒然點いて居て内人は未だ寢て居らず濃々誰やらと話して居る様子である。窓を踢めて窺いて見る則妻と一人の厠僕と一緒に酒を飲んで居る、其狀が甚だ狎褻しいので怒火如焚になつて執へやうと計へたが、又孤の力では勝てないだらうと思つたから、遂に潜身と脱肩て成の居る所へ奔けつけて成に告し、助けて呉れと乞んでみた。成は慨然と諾して従てきた、さうして直ちに内寢に抵つた。周が石で

門を搗くと内では甚い張皇かたで中々門を開けようとしな、益々急に搗くと益堅く門を閉める。そこで成が劍を抜いて撥けると劃然と頓ち關いたので、周が奔入むと僕は戸を衝いて外へ走け出したが、門外には成が居て劍で撃け、肩臂を斷り落して了つた。其間に周は妻を執へて酷く拷訊ひ、自分の牢に被収れた時から僕と私通したといふことを知つたので、成の劍を借りて首を決り、腸を庭の樹に懸けたらへ、成に従て出た。そして途を尋ねて返つてきた。

ト、驀然忽醒めた。自分は矢張り臥榻の上に横つて居るのである。驚いて、

「參差な怪夢を見た。あゝ使人駭懼た！」

といふと成は笑つて、

「卿は夢を眞だと思ひ眞の事を夢だと思つて居るんだ」

といふ。愕て譯を問くと成は劍を出して周に示した、濺血が猶だ存つて居る。周は驚き懼れて氣絶しようとしたが、竊かに成が術を使つて幻を見せたんだらうとも思つた。成は其意を察した乃、旅装を促し周を送つて歸つて來た、荏苒に里門に至た。乃、曰ふには、

「疇昔之夜劍に倚つて侍つて居たのは此處ではなかつたか。僕は惡濁を見るのが厭であるから還た此で君を待たう、如晡過になつても君が來なかつたら僕は去つて了ふよ」

周は我が家に歸つて來た。門戸は蕭索として居む人も無似である。そこで弟の家に入る

と弟は兄を見て遽ち涙を墮し、

「兄が去つた後盗が夜嫂を殺して腸を剝つて去ました。その慘酷さは實に悼ましいことでした。於今官で捕末獲ないんです」

と曰ふ。周は亦夢の醒めたやうな氣持がした。因事情を告し、もう其事は深く究めるなと戒めた。弟は良久く醋愕てゐた。で、子供は何うしただらうと周が問ねる乃、弟は老媪に命けて抱いて來さした。周は、

「此襁褓物は宗緒所關なんだから弟好く視てやつておくれ兄は人世を辭さうと思ふのである」

と云ひ終つて身を起し、徑ぐと出て去くのであつた。弟は涕泗ながらに追挽たけれど周は笑つて顧みなかつた。そして野外に來てそこに待つて居る成と一緒に行きながら、遙に頭を回して曰つた、

「忍耐とは最も樂むべき事であるぞー」

で、弟が尙ほ物を言うとするや成が闊い袖を擧げた。即、二人の姿は不可見なつた。

弟は悵然として移時立つて居たが遂に痛哭して家に歸つた。元來周の弟は樸拙とした男で不喜治家人生産た。それで數年居つうちに家は益々貧乏になつてしまひ、周の子が漸ん長きくなつても師を延ことが能ない因、自分で讀書きを數へるのであつた。一日朝早く書齋

に行くとな案の頭に函書がある。固く封をして上に仲氏啓と認めてあるのが審しく兄の手跡であつた。開いて視ると中は虚で無所有く、長さ二指許りの爪甲が祇一枚入つて居た。變だと思つて其爪甲を研の上に置き書齋を出て家人に何處から來たのかと尋ねたが、並ら知つて居るものはなかつた。で、書齋に回つて視ると研は粲々として黄金に化つて居た。大そう驚いて銅鐵に試して見ると皆な然らなつて了ふ。由之ら大層富になり、成の子には千金を分配して賜つた。因、世間では兩家に點金術があると云ひ傳へたさうである。



(一) 前漢の王章が諸生であつたとき非常に貧乏をして妻と共に牛衣の中に臥して居た、後ち出世をしたが氣に入らぬ事があつたので上奏文を奉らうとしたら細君が止めて、貴君牛衣の中で寝たときの事をモウ忘れたんですかといつた、牛衣は亂麻を編んで作つたものである。

(三) 詩經の比風に室人交も偏へに我を謫むとある、茲では、貴郎晦日の拂ひをどうするんですなぞと八釜しくいふことである。

(三) 紅日三竿は竿を三本ついだ位に日が上つたことである。

## 王成

王成は平原の故家の子であつたが、最く懶な性であつたから生涯日落れて、遂には惟數間の破家を賸すばかりとなつた。妻と一緒に牛衣に臥るやうな始末なので、妻の交謫は堪られないものだつた。時に燠熱い夏の盛りであつたが、故くから村にある周といふ人の庭園が、牆も宇も盡かり傾き唯だ一つの亭だけ存つて居る、其の中に村の人達が澤山宿つてゐた、王成も亦り雜つてゐた。

既曉ると睡てゐた連中は盡く去つて了つた。王成は紅日三竿てから始と起き、逡巡しながら歸らうと欲ると、道傍の草の根に一股の金釵がキラキラと光つてゐた。拾つてつくづく視ると細字で「儀賓府造」と鐫つてある、王成の祖に衡府の儀賓となつたものがあつて、家中に故くからある物には此ういふ款式が多く付いてゐたの因、釵を把つて躊躇してゐる歎、一人の嫗が來て、釵を尋ねるのであつた。王成は貧乏だけれど介な性であつたから、遽に出して之を授すと、嫗は喜んで極う王成の徳を贊め、

(四) 明の衡恭王、  
青州に藩たり。

(五) 公主即ち皇女  
の婚君を駙馬と云ひ  
以下の婚君を儀賓と  
いふ。

(六) 詩經の衛風に  
首飛蓬の如しとあ  
る。

(七) 饑て菜を食つ  
てゐると顔色が悪る  
くなるそれを菜色と  
いふのである不景氣  
な色である。

「此の釵は幾らでもないが、先夫の遺澤なので  
といった。」

「先夫とおつしやるのは伊誰です」

と尋ねると、故の儀賓王東之だと答へた。王成驚いて、

「それは私の祖です、何うして遇つたんでせう」

といふと、姫も驚いて、

「汝が王東之の孫なのかエ、我は狐仙で、百年前君の祖と縉綵になつたが、お君の祖が

歿なられてからは老身も遂に身を隠くして了つたのだよ。過まつて此に釵を落し適とお子

の手に入るといふのは天數だねー」

と曰つた、王成も曾て祖に狐妻があつたといふことを聞いてゐたので其の言葉を信じ、便

で、臨顧くださいと姫を邀へると、姫も従つて来てくれた。そこで妻を呼び出して姫に見は

したが、女房は散れた衣に蓬の如く亂れた首をして、黯い菜色をしてゐた。姫は、

「噫王東之の子孫ともあらうものが一貧至此したのかいー」

と嘆息し又敗れた竈に煙もないのを見て、

「家計が如此になつて何うして謀生のだエ」

と尋ねた。因で妻が細かに貧乏の状を述して嗚咽飲泣と、姫は釵を婦に授し姑くのあ

ひだ質しちに入れてい銭かねをからせ米こめを買かはした。さうして、

「三日かののち後に復相見またあひましよう」

といつて出て行ゆかうとするのを、王成わうせいが挽留ひきとめると、

「汝おまへはたつた一人ひとりの妻つまですら存活くらさして行ゆくことが不能できないではないか。私わたしが一緒しょに在ありて仰じつと屋而居してくらしたところで何なんの裨益やくにたとうぞ」

といつて遂たうとう逕すぐに出でていつて了しまつた。それから王成わうせいが妻つまに故わけを言はなすと、妻つまは大おほいに怖こはがつたが、王成わうせいは嫗おんなの義氣ぎぎを誦とき聞きかせ、姑しゅうとめとして事つかへよといつたので、妻つまも諾しょうちしたのであつた。

踰こえて三日かめ目に嫗おんなは果はたしてやつて來きた、そして數枚すうまいの金かねを出だして粟あはと麥むぎとを一石こくづつ糶かはせ、夜よるになると短ちひさな榻ねこいで婦つまと一緒しょにねた。婦つまは最初さいしよ懼おそろしがつた然けれど、嫗おんなが拳いっくしん々くで呉くれる様子やうすが察わかつたので、遂しまひには少すこしも疑うたがひ懼おそれぬやうになつた。さて翌日よくじつになると嫗おんなは王成わうせいに向むかひ、「孫まごよ、情なまけてゐてはいけないよ。小生業こあきなひでも操やつて見みたら何どうだエ。座食あぐひをしてゐては鳥つづ可長かないよ」

といつた。で、王成わうせいが、貲もとでが無ないからと告はなすと、

「汝おまへの祖おほぢが生いきて在あられた時分じぶんには金帛かねは憑とり所取しだいだつたが、我わたしは世うきよ外のほかの人ひとでそんな物ものは需いりもしなかつた故から、多たく取とることはなかつたが、花粉けしやう之の金かねとして四十兩りゅうだけ積たくはへて置おいたの

が、至今猶存つてゐる。どうせ久貯ても用のない金だから、その金を將つて去つて悉かり葛布を市つて刻日都に赴つたら微しは息が得られるだらうよ」

といふので、王成は姫の言葉に従つて早速五十餘端の葛布を購つて歸つて來ると、姫は旅の趣装を命けた。燕都には六七日で可達れるのである。姫は囑た、

「勤めなさい、懶けなさるなよ。急ぎなさい、緩しなさるなよ。一日でも遅くなると後悔しても已晩いよ」

王成は敬しんで諾し、貨を囊に入れて就路たのであるが、途中で雨に遇つて、衣も履も浸濡れになつて了つた、王成は平生風霜を不歴いから委頓不堪で、暫く旅舎で休んでゐたが、不意も雨は淙々と暮れ方まで降り徹き簷には繩の如な大きな雨だれが懸つてゐた。一宿を過ごして朝になつたが、濘は益々甚しく、往來の行人は淖みを踐んで脛を没するといふ有様であつた。王成これに心畏苦を爲し停午まで待つてゐると始漸道は燥いたが、而も陰雲復び合し雨又大に作るといふ次第なので、止むを得ず信宿つて乃行けた。北京に近づいて葛の價が翔貴つたと傳聞し心竊喜で都に入り、先づ客店に解装した。すると客店の主人は深く王成の晩かつたことを惜しんだ。といふのは是より先に南方の往來が始と通じたばかりで、葛の至るのが少なかつたから、北京中の巨きな室で購ひ込んだものが頗る多かつた。價も甚く昂つて常に較べると三倍ぐらゐになつた。ところが王成の著く一日前に葛が雲集きたので、

價が頓貶ち後から來た連中は皆な失望した。と主人が故を話すのをきゝ王成はすつかり鬱々  
 不得志。そして日を経るままに、葛は愈々澤山到著し、價は益々下落するばかりだつた。王  
 成は利が無いからといふので敢售らずにゐた。其中に十日餘りを遅して了た。食耗を計す  
 るとだんだん繁多み、倍す憂悶を益すばかりである。見かねて客店の主人が、賤く鬻つて了  
 つて改めて外の圖をつけなさいと勸めて呉れた。その言葉に従つて投げ賣りにすると十兩餘  
 りの虧費となつた。斷念めて翌朝は早く起き、將作歸計として囊中を啓けて見る則、金がな  
 い！ 驚いて客店の主人にさう告つてみたが、主人とて爲計ことも出來ない。或人が鳴官へ  
 て主人に償はせたらいいだらうと勸めたが王成は嘆息し、

「これは自分の命數である、主人に何の尤があらう」

といつた。此言を主人は聞いて王成を徳とし金を五兩贈つて王成を慰め歸らせやうとした。  
 けれど自ら念へてみると歸つて祖母に合す面目もないので、蹀躞内外するばかりで進退維谷  
 つてゐたが過鶉を鬻はして居るのを見ると一遍に數千文を賭け、一匹の鶉を市ふ毎に恆も百  
 錢では止まらないといふ有様だつた。王成これを見て忽ち意を動かし、囊中の貲を計へると  
 僅々鶉の販賣が出來さうである。そこで此事を客店の主人に商すると、主人は亟に始めな  
 さいと慫慂めたるへ、假寓も飲食も不取其直からと約束してくれた。王成は喜んで鶉を盈擔  
 購ひ込み復た都に來た。主人は喜んで景氣をつけ、速く售れるやうにと賀つて呉れた。とこ

ろが夜になると大變な雨で曙まで降り徹し天明で見ると衢は河のやうな水である。而も淋零は猶ほ休まない。居として晴れるのを待つてゐたが數日降り連綿て更に休止ない。起つて籠の中の鶉を見ると漸と死んで行く。王成大に懼したが不知計之所出い。越日ぎると愈よ多死んで了つて僅かに數頭を餘すのみとなつたから、一籠に併めて飼つて置いて經宿て往つて窺る則、一鶉だけ僅と存つて居た。因主人に斯々と告して不覺涕を墮すと主人も、扼腕して口惜しがつた。王成は、金が盡り歸ることが出来ないのを度へ、但だ欲覓死るばかりであつた。主人はそれを慰めて、共に生き残つた鶉を視に往つたが、審諦て、  
「此れは似英物だぜ。外の鶉の死んだのは、此が殺したのかも知んよ。どうせ君は暇で無所事んだから、請之を把つて、見たまへ。そして如し良かつたら、賭をしても謀生していけるよ」

そこで王成は主人の教へるとほりにした。既がて馴れた。主人はそれを王成に持たせて街頭に向かせ酒や肉を賭けてやらせて見ると、鶉は果して甚く健いもので輒ち贏を博した。主人は喜んで王成に金を授し、復た子弟らと賭を決つたが、三戰三勝であつた。斯くて半年許りの間に二十金を積み蓄へたので心益々慰み、鶉を視ること命の如くであつた。是より先のこと某といふ鶉好きの王があつて、毎も上元の節に値ふ輒、民間の鶉持ちを放に邸に入らせ鶉を角はさせるのを道樂にしてゐた。それで客店の主人は王成に向ひ、

「大した富が立ろに致ることがある。實に所不可知のは君の運命だ」

と曰つて告以故し、導をして與俱に往つた。主人は途々囑した、

「脱敗たつて喪氣して出るばかりさ。倘し萬に一、君の鶉が闘ひに勝つたら王が必市うとするに相違ない、其時君が應してはいけないよ。如王が固強て賣れといつたら、惟だ僕の首を瞻てゐたまへ。そして僕が首肯のを待てから返辭をしたまへ」

王成は曰つた、

「諾した」

で、二人は王の邸へ至と鶉を持つた連中は堀下で肩摩つて居た。頃之て、王が御殿に出られると、左右の近侍が一同に向つて、

「鶉を闘はせたいと存ずる者は上つて參れ！」

と宣言た。即一人が鶉を把つて進み出た。王は近侍に命じて王の鶉を放たせた。男も亦り鶉を放つた。略一騰蹕したかと思ふと、男の鶉は已敗てゐた。王は大う笑はれた。俄頃の間、階上に登つて敗たものが數人に及んだ。客店の主人は「可知」と曰つて王成と相將俱に階上に登つた。王は王成の鶉を相て、

「時に怒脈がある。此は健羽だ、輕々しく敵すべきでない」

と曰つて鐵喙といふのを取して當らせるやうに命ぜられた。一再騰蹕た。而と王の鶉は羽が

(八) 左思蜀都の賦  
に鳥鍛羽すとある鍛  
は殘である。

鍛少なくなつてしまつた。更に良いのを選び、再易て再敗けた。王は急に、宮中の玉鶉を取  
てと命ぜられた。片時して把出したのは鷺のやうな眞素な羽で、神駿不凡ものであつた。王  
成、此鶉を見て意饒て了ひ、跪て罷めることを求つて曰つた、

「大王の鶉は神物ですから吾の禽を傷め吾の業を喪はせるだらうと恐致します」  
王は笑つて、

「いや縦之て見よ。もし其方が脱闘て死んだら厚に償うて取らせ當う」

と曰はれた。王成は乃鶉を縦つた。王成の鶉は直に王の鶉に向つてとびかかつた。玉鶉  
が方來則、王成の鶉は怒雞の如に伏して待ち受けてゐる。玉鶉が健な喙で衝て來る則、  
王成の鶉は鶴の翔るが如き態度で之れを撃つ。進退頡頏やや伏時ほど闘つたが、玉鶉は漸  
懈れた。而て益々烈しく怒りをなし、益々闘ひを急ぎ、未幾すると雪のやうな毛が摧落ち翹  
を垂れて逃げて了つた。數千の觀者は感歎し羨やまぬ者は罔かつた。王は王成の鶉を索取せ  
而、親しく手に把り喙から爪先に至るまで審周一過れ、王成に、

「此鶉を貨ぬかな」

と問はれた。王成答へて、

「小人は恒産が無いのですから此鶉に依つて命を繋いでゐるので願售とは思ひません」  
といふと、王は曰はれた、



(九) 前漢の文帝が露臺を作らうと思ひ工匠を召して問はれたら百金かかりますと申上げた、すると帝が百金は中人の産であるといつておやめになつた。

(一〇) 趙に名玉があつたのを秦の昭王が十五城と交換しようといはれたので之れを連城の璧といつた。

「而に重なる直を賜る。中人の資産家になれるが賣りたいとは思はぬかの」

王成は良久しく俯むいて思へたする、

「本々置したく不樂のですが、大王が此鶉をお愛好になつてゐるのを願へまして、苟づ小人に得衣食業だけのことをして頂けばよいといたしませう。外に何も求はありませぬ」

と曰つた。王は直を請求しろと曰はれた。王成は答へた、

「はい、千兩頂戴いたしたいのです」

王は笑つて曰はれた、

「癡男子、此れは如何なる珍寶で千兩の直がするのぢや」

王成は曰つた、

「へい、大王は寶と爲されませんが臣は連城の璧も之には過ぎぬと思つて居るのであります」

王は曰はれた、

「それは如何いふ譯ぢや」

王成は曰つた、

「はい小人は此鶉を把つて市塵に向きまして毎日數金を得、それを升斗かの粟に易へ一家十餘食指無凍餒憂でムいます。實に如何なる寶も之れには如くまいと存じます」

王が言はれた、

「自分は不相虧のではない、便二百金與らせう」

王成は首を揺つた。又百金を増された。王成横目で主人を視たが、主人が色不動である乃、

「大王の命を承り、百兩だけ價を減き請」

と曰ふと、王は曰はれた、

「休矣。誰れが九百兩も出して一匹の鶉に易へ肯ぞ」

王成は鶉を囊に入れて行かうとした。王は呼びとめて曰はれた、

「鶉人來れ、鶉人來れ。では六百兩を給はさう、肯なら則售つて行け、否なら則已る

まで耳」

王成は又主人を見た。主人は仍り自若して居る。けれども王成は心願盈溢なので機會を失

ひはせぬかを恐して曰つた、

「此んな數で售るのは心實快々のですが、交而不成せんと獲戾滋大なりますので、無己

即、王命の如に致しませう」

王は喜んで即時に金を秤つて王成に付はされた。王成は金を囊に入れお拜賜べて外へ出る

と主人は懟んで、

「僕は初め子に如何と言たか。子が自分で急驚いで了つたんだ。再少靳之て居れば、八百

兩は在掌中矣だのに」

といった。王成は歸つてから金を案の上**に**ぶちまけ主人に請ぞ思ふだけ自分で取りたまへ  
といったが主人は受けとらなかつた。又固に讓之た。乃と飯直だけを盤計して受けとつた。  
王成は旅装を整へて歸つたが、家に至くと所爲を歴り述し金を取り出して皆んなで慶び相つ  
た。そこで姫は命けて良田三百畝を治はせ起屋て作器くり、居然世家となつた。そして朝は  
早くから起き王成には耕作を監督させ婦には機織りを監督させ、少でも惰けれ輒、詞りつけ  
たが、夫婦とも安んじて敢に怨詞などいはず精を出したので、三年過たら益々富な暮しにな  
つた。一日姫は辭欲去と云ひだした。夫妻は驚いて共に挽きとめ至泣下すのだつた。姫はそ  
んならといつて止つたが旭日候之と己沓てゐた。

# 青鳳

太原の耿氏は、故は大した家がらだつたので、第宅など、宏潤としたものであつたが、後になつて凌夷た爲め、連互た樓舎が半分は曠廢になり、因で怪異ことが生てきて、堂の門が自分で開いたり掩つたり、家人が中夜になつて駭き譁いだりするところから、耿は患がつて別墅に移居し、老翁を留して門をまもらせて置くのであつた。

由此といふものは、益々甚く荒落て、或り笑語や歌や吹の聲などが聞えるのであつた。耿に去病といふ狂放不羈な従子があつたが、翁に、怪しいことを聞見したら奔けて告之にこいと囑けておいたので、夜に至つて樓上の燈光が明るくなつたり滅えたりするのを見るときとすぐに走つて生に報らした。生は中に入つて異を覘めようとした。翁は之を止めたけれども生は聽かなかつた。素より門戸には習識て居たのであるから、竟う蓬蒿を撥けつゝ曲折つて入つていつた。

樓に登つた。殊も異いことがなかつたから過つてゆくと、人語が切々と聞える。潜と窺つ

(二) 易内則に十有五年而筭とある。筭は簪のことである。

(三) 易需に有不速之客三人來とある。速とは招くことである。

(三) 山斗とは太山北斗の略之を仰ぐことと太山北斗の如しといつたのである。

て見ると巨きな燭が双つ焼つて晝の如に明るく、一の叟が儒者冠をいただいて南面に座り一の嫗が相對つてゐた。ふたり俱年のころは四十餘りで、東向きになつて居る一の少年が二十許り、右てに居る一の女郎は裁及筭ぐらゐでもあらう。酒や戯が案に滿のせてあつて、團座になつて笑ひながら語して居る。生は突入ると笑つて呼つた、

「不速之客が一人來ましたよ」

群は驚いて奔匿た。そして叟だけ出てきて叱に

「人の閨闈に入つてくるのは誰何だ！」

と問いた。生は曰つた、

「此は我が家の閨闈で、君が之を占領して居るんじやないか。そして旨い酒を自たちで飲むだけで、一も主人を邀ばないのは、太り吝じや母いかね」

叟は審睇て曰つた、

「主人ではない」

生は曰つた、

「我は狂生の耽去病で、主人の従子さ」

すると叟は致敬に

「久しいこと仰山斗て居ました」

(四) 曹公が孫權の軍伍の整然として居るのを見て、子を生むなら當に孫仲謀劉景升のやうにありたいものじゃ、自分の息子は豚の兒みたいなものだと云つたとある。

(五) 説文に倮儻不羈也とある。

と曰つて生に揖し、便て家人を呼んで饌を易へさせようとした。けれども生が之を止めた乃、叟は客に酌をした。生は曰つた、

「吾輩は通家やうなものだ。座つて居た客たちは無庸見避よ、還た招んで飲むやうに祈ひたいものだね」

で、叟が孝兒と、呼ぶ俄、少年が自外入てきた。叟は曰つた、

「此は豚兒です」

すると少年は揖して座つた。門閤を尋ると叟は、

「義君といふ名で、姓は胡といひます」

と自言た。

生は素が豪傑はだで談議風生をするたちだつたし、孝兒が亦り倮儻たちだつたから、

傾吐の間に雅相愛悦、生が二十一で孝兒より長二歳であるところ因、孝兒を弟ぶんとすることになつた。

ことになつた。

叟は曰つた、

「君は祖が塗山外傳を纂られたのを知つて居ますか」

生は答へた、

「エ、知つてますよ」

叟は曰つた、

「我は塗山氏の苗裔なんです。唐から後の譜系は能く憶へて居ますが五代以前のことは傳はつて居ないので。公子が垂教へてくださると幸ですがね」

生はそこで塗山の女が禹を佐けた略を述べたのであるが、粉飾の詞が多あつて、妙い緒が泉の湧き出すやうなので、叟は大そう喜んで子に謂曰た、

「これまで未聞つたことを今幸ひに聞くことが得たんだ。公子は亦り他人とはおもはれない。阿母と青鳳とを請てきて共に聽かせなさい。そして我の祖の徳を知らせなさい」

孝兒は幃の中に入つたが、少時してから嫗が女郎と偕に出てきたのを審顧と、弱態生嬌、秋波流慧、人間無其麗也である。叟は嫗を指して、

「此が老荊です」

と云ひ又女郎を指して、

「此が青鳳といつて鄙人の姪女ですが、頗う慧で、見たり聞いたりしたことは、記て居て忘れません故、喚んで聽かせるのです」

といつた。

生は談が竟と飲むのであつたが女郎を瞻顧まま停睇不轉ぬので、女は之を覺つたとみへ、俯其首て居るのであつた。そして生が隠り蓮鉤を躡むと、女は急いで足を斂めたが、慍怒つ

(六) 禹が塗山にいつた時は三十で獨身であつた。禹が自分が妻を娶るときには必らずしるしがあるだらうといつたら、白毛九尾の狐が顯れた、そこで禹は白いのには自分の服である九尾は王の證であるといつて塗山の女を娶つた、それを女嬌といつた。

た風も無かつた。生は神志が飛揚やうになつて、不能自主案を拍つて、

「如此な婦を得れたら、南面王とでもとり替へ無いネ」

と曰つた。媼は生が漸に酔つてきて、益々もの狂はしくなつてくるのを見て、女と俱に起つて帷を牽げて入つてしまつた。生は失望して叟に辭れて出ていつた而ど、心に縈々つた青鳳のことを忘れ不能たので、夜に至つて復た往く則蘭麝のかほりが猶だ芳つて居た。而し終宵凝と待つて居たが寂として聲咳もなかつたのであつた。

生は歸つて妻と謀し、携家で之に居ひ、冀かして一ど遇ひ欲いとおもつたのであつたが、妻は從しなかつた。生は、乃、自だけ往つて、樓下で書など讀むのであつた。

夜になつて、方ど、机に凭れて居ると、披髪した、面いろの漆の如に黒い一鬼が入つてきて、目を張りあげて生を視んだ。生は笑つて染指研墨、自で顔に塗つた。そして目を灼灼さして相與對視てゐた。鬼は慚かしさうに去つてしまつた。

次の夜、更既深から燭を滅して寢ようとする、樓の後の扇を發して闐然と闐いたおとがした。生は急に起きあがつて窺いてみる則、扇が半ば啓いて居た。そして履聲細碎が聞こえ、燭光が房中からもれて出た。視之則、青鳳だつたのである。青鳳は驟に生を見たので駭いて卻走をした。そして遽いで双扉を闔めた。生は長跪いて致詞つた、

「小生が險惡をも不避すに來てゐるのは、實く卿故なんです。幸ひ他の人も無いし、握手

(七) 集韻に闐音、  
合扉聲とある。



をして笑にっこりすることが得できれば、死しんでも憾うらみはありません」

女むすめは遙とほくから語いつた、

「倦あつ々つい深おな情さけを妾あにし豈なんで知わからずに居ゐませう。但ただ閨かていの訓をしへが儼きびしいので奉したがふ命めいことが不でき敢きないんですの」

生せいは哀あい願ぐわんして曰いつた、

「亦にくたいのくりんけいそのをむんじやない不ふ敢た望ひとめ肌あへ膚まんぞく之を親まんんです。但ただ一ひとめ見あへ顔まんぞく色まんぞくば足まんぞくするんです」

女むすめは肯しょうち可ちした似やうであつた。そして關とを啓あけて出でてきた。生せいは捉てをとつて之ひきよ臂よ而よ曳よ之よせ。狂くるはしいほどの喜よろこびをもつて、相いっしょ將しよに樓したざしき下はいに入り、擁ひさ而まじへ加て諸たきあ膝あつたのであつた。

女むすめは曰いつた、

「幸さいひ夙ふ分ぶんがあるのでかうしてお目めにかかれましたけれど、此こ一よひ夕ひが過すぎれ即ま、相おも思もつても無だめ用めですよ」

生せいは問きいた、

「何な故せです」

女むすめは曰いつた、

「阿おぢ叔ちさんは君あなたの狂らんぱうなのを畏こはがつてるんですの。故それで厲はげ鬼ものに化なつて相おどし嚇したんです而けれど、君あなたが不へい動きだつたもんですから、今いまでは已もうト居ひつこ他所すことにしましてね、一うちのもの家みんは皆かな什ざい物を移はこん

で新らしい居に赴つたんです。而で妾が留守をして居ましたが、明日は發つんですの一言已ると去かうと欲て云ふのだつた、

「叔さんの歸つてくるのが、恐ですわ」

生は強にひき止之て欲與爲歡るのであつた。方、持論てゐる間に、叟が掩入つて來た。女は羞ぢもし懼れもして、無以自容いので、俯首倚牀たまま帯を拈くつて不語つて居た。叟は怒つて、

「賤婢！ 吾の門戸を辱したな！ 速やく去かないか！」

と曰ひながら、女を鞭撻ち且、從其後いてゆくのであつた。女は低頭いたまま急いでたち去つた。叟も亦り出ていつた。あとを尾けて聽いて居ると、詞話萬端しめるので、青鳳の嚶々啜泣のが聞えた。生は心意を割かれるやうなきがした。で、大きな聲でいつた、

「罪は小生に在るので、青鳳に何の與がありません。倘し鳳さんを宥さるゝなら、刀鋸鐵鉞小生願身受之です」

すると良久く寂然になつた。生は乃で寢たのである。

自此は第内に絶く聲息がしなくなつた。生の叔さんはそれを聞いて奇におもひ、不較直す居を售りたいと願んだ。生は喜んで擁家口で遷し、甚う意に適つて居た。而し青鳳のことは未嘗須叟も忘れなかつたのである。

(八) 冬至の後一  
五日にして寒食の節  
となる寒食の後二日  
を清明といふ。

會てうど清明せいめいであつた。上墓はかまゐりをして歸かへらうとすると二にの小狐こぎつねが犬いぬに逼逐おほれるのを見た。其その一つは荒地あれちを指さして竄去にひうせたが、一ひとつは道上みちなかで皇急あわてまどひ、生せいを望見みると依依たよつてきて哀かなしさうに啼なくのであつた。そして耳みみを翦ふせ首くびを戢たれて居ゐるやうすが、援たすけて乞くれといふ似やうなので生せいは憐あはれにおもひ、裳衿すそを啓ひろげて提抱つつんで歸かへつて來た。そして門とを閉しめて牀ゆかの上に置おく則と、それは青鳳せいほうだつたので、大たいそう喜よろこんで、慰なぐめたり問きいたりするのであつた。女をんなは曰いつた、

「適ちやうど婢子こしもとと戯あそんで居ゐて、此こんな大厄たいやくに遭あつたのよ。脱もし郎君あなたで非なかつたら葬いぬのゑじき犬腹つたに必ちがひいね。以にんけん非類でないからつて憎いやらないで望くださいね」

生せいは曰いつた、

「日切まい懐ち思おもつて居ゐて繫ゆ於め夢魂みづらくらゐなんだ。卿きみを見て異めづらしい寶たからを獲てれた如やうにさへおもつてるのに、何なんで憎いやるものか」

女をんなは曰いつた、

「此う天數めいね也、不因さい顛覆がなら何なんうしても得相いつしよ從じれないのに……。然しかし幸さいひ婢子こしもとは妾あなしを已しん死でつたとおもつてるに必ちがひいから、君あなたと堅永いつまでも約そはれてよ」

生せいは喜よろこんで別べつな舍へやに舍すま之はしておいた。

二年ねん餘あまり積たつた。生せいが方ちやうど夜讀やどくをして居ゐると、孝兒かうじが忽ふいに入はいつて來た。生せいは讀よむのを輟よして訝ふしさうに來た所ところを詰たづねた。孝兒かうじは伏地ひれふして愴然かなしげに曰いつた、

「家君に横難がふりかかつたんです。君で非ければ拯けることができ莫いんです。家君が自分で詣て懇願すべきはずなんです。お納れにならない恐と思つて、故で某を來させたんです」

生が何ういふ事かと問ねると孝兒は曰つた、

「公子は莫三郎さんを識て否か」

生は曰つた、

「此は吾と年家子也」

孝兒は云つた、

「明日は將適う。それで倘も獵とつた狐が有つたら君が之を留ておいて望きたいんです」

生は曰つた、

「樓下で羞められたのが、耿々と念に存つて居るんだ。他事なんか不散與聞よ。しかし

必しても僕に效綿薄をさせようといふのなら青鳳が來なければ不可さ」

孝兒は零涕して曰つた、

「鳳妹は野死をして已三年になるんです」

生は衣を拂ひ、

「既爾ら則、恨みは滋いよ深いわけだ」

(九) 綿力薄材は共に力の弱いことである、自分の力だから謙遜して弱いといふのである、前漢嚴助傳に淮南王曰、越人綿力、薄材不能陸戰とある。